

おんな
かくとうか
らんぶ

格闘家

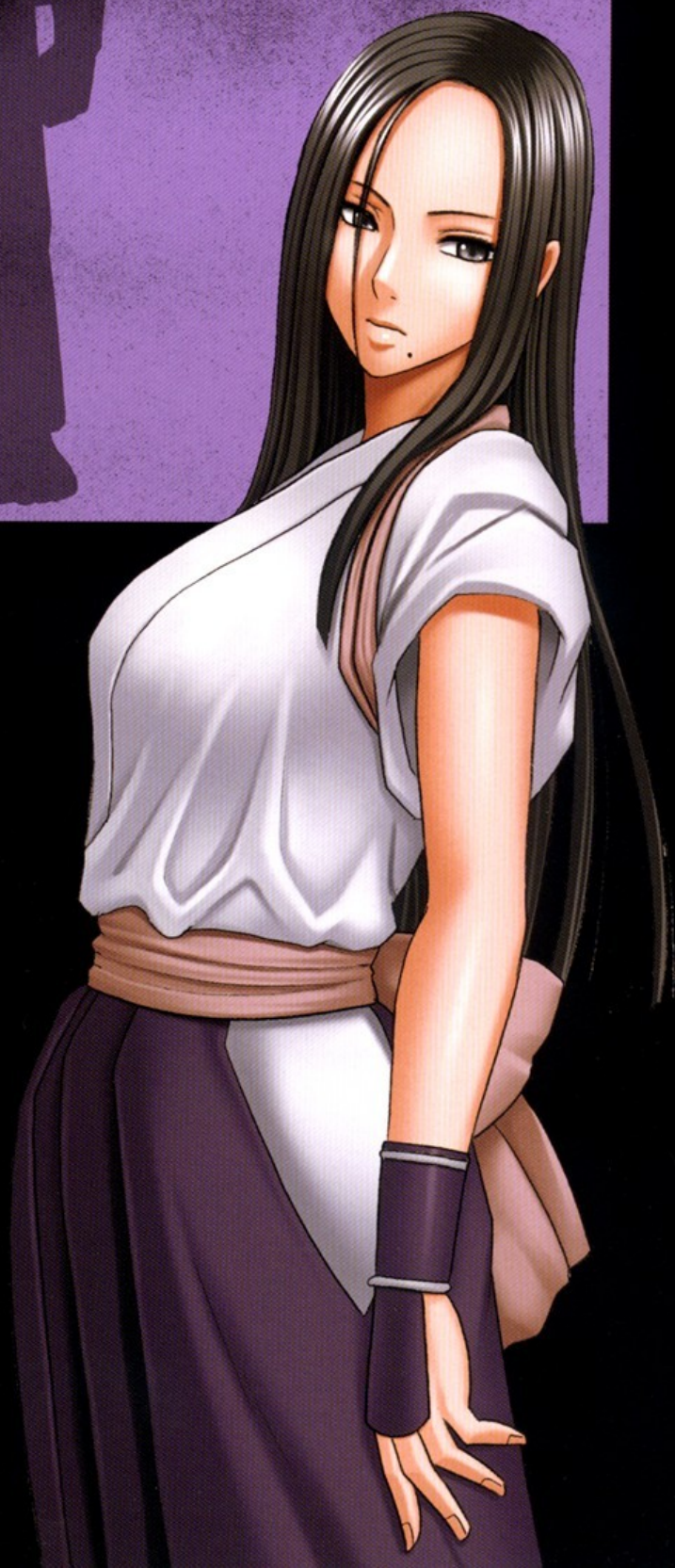
乱舞



成人向
コミック

火浦鏡子編

幼い頃、人生で初めて味わわされた敗北。それはまさに屈辱だった。格闘家 鬼塚シユウ 20歳―。彼はあの日の屈辱を払拭するためだけに格闘技を学び、ストリートファイトに明け暮れ、強さを追い求めた。そして機は熟し、ついに復讐のときがやってきた。



ターゲットは古武術家 火浦鏡子、23歳―。今は亡き父親にかわり、町で小さな古武術の道場を営んでいる。あの日の屈辱をあの子にも味わわせてやる……。シユウは暗い笑みを浮かべ、拳を握りしめた。



火浦道場——。

郊外の街中で、古武術を専門に教えている道場である。

古武術・火浦流の免許皆伝者が代々道場を営み、
広く門下生を受け入れてきた。

護身術と心の鍛錬を旨と掲げているため、
地域住民にも愛され今まで存続することができた。

先代の早逝によって一時は危ぶまれたが、
幸いにしてその一人娘の火浦鏡子は

武術にも勉学にも通じる才女であり、
遺志を継いで道場を再開する。

一見したところ伶俐な外見の鏡子だが、
細やかな配慮で意外なほど子ども受けが良く、

火浦道場の新たな人気と評判を築きつつあった。
そうして代がわりの波乱を乗り越え、

門出を迎えることができた火浦道場だったが……。
「えいっ！」

「やあ！」

子どもたちのはつらつとした声で、
こじんまりとした道場が活気に包まれている。

「ほら、もつとちゃんと腰を入れて、踏ん張って！」
若い女性の張りのある声が、その活気に締めりを与えた。

「はい、鏡子先生！」
子どもが先生——火浦鏡子——の言う通り、
及び腰だった姿勢をぐつと前に入れた。

「うん。よくなつたよ！」
鏡子が微笑むと子どももはにかんで笑った。

今日の午後の授業は、
小学校低学年程度の子どものお稽古だった。

六人ほどの小さなクラスだが、
子どもは皆、鏡子によくなついている。

道場の掃除も行き届いていて、
柱や天井は古びてはいるが清潔で明るい。

そんな和気あいあいとした雰囲気のある道場に、
突如冷風が吹き込んだ。



「……邪魔するぜ」

道場の戸を勢い良く開け放ち、屈強の男達が数人、道場のなかに乱入してきた。「何ですか!?! あなたたちは!」

鏡子は何事かと眉をしかめ、男達に剣呑な声を放つ。

だが男達はまったくとりあわず、ずかずかと子どもたちへと歩み寄った。「ちよつと 待ちなさい!」

子どもが危ない――

男達の発している雰囲気異常さに気付き、鏡子は止めに入ろうとする。

「おつと」

だが、男達のなかでもひととき腕の立ちそうな一人が、鏡子の動きを阻止した。「……!」

男は鏡子との間に絶妙な間合いをとって動きを封じる。

うかつに動こうものなら男から手痛い牽制が飛んでくることは明白だった。
(この人……できる……!)

腕の立つ男への対応に手間取っている間に、

他の数人の男達が子どもを拘束した。

子どもたちも異常な雰囲気を感じ、おびえたように男達を見上げている。子どもを人質にとられたようなものだった。

「フッフ……」

「何……ッ? 何が目的なの……!」

怒気を含んだ鏡子の声。

子どもの安否がかかっているだけに、普段の冷静さを欠いてしまっている。「火浦鏡子……久しぶりだな」

そんな鏡子の様子を楽しげに見た後、相対している腕の立つ男が口を開いた。

「……誰? 知らないわ……あなたなんて……!」

「……フッフ……そうか……覚えてないか……。オレのほうはお前のこと一日も忘れたことないんだけどな」

「……」

「今からオレと1対1で対戦しろ、火浦鏡子。」

そうしたら子供たちは開放してやる。」

(何なの……道場破り? 全然 見覚えがないけど……)

無益な争いは避けたい。

だがこの状況ではそんなのんきなことは言ってられなさそうだった。

「分かったわ 相手してあげる。」

そのかわり子どもたちには一切手を出さないで!」

鏡子には男の意図も今の状況もいまひとつ飲み込めなかった。

けれど、男の目が放つ執念深そうな鈍い光は気にかかる。



男が目で合図すると、他の男達は脇へ下がった。子どもたちも連れられて、大人しく座らされる。

「じゃあ始めるぜ。いいな？」

「……わかったわ」

有無を言わせぬ男の調子。

鏡子は構えをとって男を視る。

「フ……」

男は笑い、無造作に拳を繰り出す。

(速い……！)

構えも無しにこれほどのスピードの打撃が放てるものか。

鏡子は内心驚愕する。

かわせることはかわせるが、反撃の糸口は見つけられなかった。

「……ッ」

いやな汗が浮かんでくる。

だが、これほどまでの使い手が何故こんな小さな道場に来るのか。

そんな疑問符も胸に浮かぶ。

(ダメ……今は集中しないと)

鏡子は男との間合いを測りなおし、じりじりと距離を詰めた。

「ふう……」

呼吸を整えつつ男の隙や癖を探る。

「……ッ！」

男がわずかに身体をひねる。するとまた構えもなしに豪速の拳。

——パシッ！

「く……」

「ほう……。さすがだな、火浦鏡子。

それでこそ今日この日まで

お前を思い続けた甲斐があるというものだ」

「……」

男の拳を受け流した手のひらが痛む。

火浦流古武術は合気道に近く、相手の動きにあわせ、

相手の力を利用して投げや反動の打撃を繰り出す技が多い。

しかし、まだ男の動きを見極めることができていない。

(もう少し……もう少し様子を見れば……)



「が……がんばれば、鏡子先生！」
ぴりぴりと緊張感の張り詰めた雰囲気の中、子どもの声が響く。

（ありがとう……！）
礼を言う余裕はないが、子どもたちのためにも負けられないと集中し直す。
「ずいぶんなつかれてるじゃないか」

「……ッ！」

言葉と共に、今度はローキックが繰り出される。

とつさに引いて避けるが、それが裏目に出た。

若干体勢がくずれたところで男が一気に距離を詰めて拳を繰り出す——！

「くっ！」

日頃の鍛錬のたまものか、とつさに動いた右手が男の左手を外に払っていた。けれどギリギリの反応であったことはかわりない。

とても男の動きを読んで反撃するどころではなかった。

「はあ、はあ……」

（おかしい……こんなに息が……）

まだ男と相対して五分も経っていないはずだし、動き自体もほとんどない。なのに呼吸が乱れ始めている。

「先生、がんばって！」

「まけるな——！」

子どもたちが声援を送るが、その声色にはどこか不安が混じっていた。

彼らでも鏡子の劣勢がわかるのだろう。

「どうした、そんなものか？ ククク……」

男が暗い笑みを浮かべ、また打撃を繰り出す。

（く……読めない……この、蛇みたいな動き！）

「はっ！」

またなんとか拳を受け流し、今度は鏡子のほうから距離を詰めた。

（打撃では太刀打ちできない……だけど、組み技でなら……！）

鏡子が独特の足運びで一気に相手の懐に入り、入り身投げのような形をとる。

「やあ——」

相手の打撃の勢いを利用したこの技なら、

今の男の姿勢では容易には避けられないはずだった。

「おっと……」

「……？」

だが、男はすると体幹を移動させ、綺麗に鏡子の背後へとまわりこむ——。側面にまわりこもうとしたのを逆手にとられたのだ。



だ…ダメ！
冷静にならないと！

ククク……
その程度か？

「な、なにを……!?!」

後ろにまわりこんだ男はいきなり鏡子の胸元に手を差し込んだ。

「や、う……!?!」

身をよじって逃げようとする鏡子の動きを巧みに封じつつ、股間にまで手を伸ばす。

「!?!」

袴の裾から侵入した男の指が鏡子の下着に触れた。

「やめ……なさ、くう!?!」

鏡子の視界の端に子どもたちの姿が映る。

皆、ぽかんと口をあけて鏡子を見ている。

何が起こっているのか、まだあまりわからないのだろう。

「う……く、こんな、どういうつもり!?!」

「フフ……喋ってる場合じゃないだろ？ ほら、ガキが見てるぞ」

男の手がさらしの上から鏡子の胸に触れ、ゆっくり持ち上げる。

「く……ッ」

その手の動きは鏡子に肉体的なダメージを与えるものではなかった。

子どもたちに鏡子の恥ずかしい姿を見せつけるために、

胸を強調するように持ち上げる。

「はあ、んん……!?!」

指先が胸の先端に当たり、思わずおかしな声をあげてしまう。

(しっかり、しないと……っ)

また子どもたちが視界に映る。不安げな表情。

守らなくてはいけない――。

すつと息を吸って力を丹田にためてから、一気に発勁する。

「や、はあっ!?!」

肩を思い切り入れ、男の身体をくぐるようにして背で投げた――

つもりだった。

「見切ったぞ」

「!?!」

だが男は鏡子の動きに合わせて、側面に重心を預けて動きを封じる。

「ど、どうして……!?!」

「フン。火浦流古武術もこの程度か」

男は笑い、背後から鏡子をつしりとホールドした。

そして胸元を押し開き、素肌を露出させる。

どうした？
アンタの流派は
呼吸が大事なんだろう？

そんなことじゃ
オレに技は
決まらないぜ？

こんな……
純粋な子どもたちの
前で……！

モクモク

モクモク

「う……っ！」

両の手でもって鏡子の双丘をわしづかみにする。

「やめ……はあ、くう……！」

逃れようとする鏡子だったが、男がそれを許さない。

「せ、先生……？」

「負けるの……！」

子どもたちの悲痛な視線。

だが、男子の目にはどこか熱もこもり始めている。

その熱は鏡子の見たことのない、本能に近い色を帯びていた。

（こんな……純粋な子どもたちの前で……！）

怒りにかつと身体が熱くなる。

「は……ん、う……はあん！」

だが、男の手が動いたとき、子どもたちの視線を意識するたび、

どくどくと胸は早鐘をうち、呼吸は乱れる。

「う、く、はあ、あ……」

いくら呼吸を整えようとしても、集中を男の手の動きが乱す。

（どうして……こんなことを……）

男が今していること。

男の目が放っていた執念。

男が少しだけ語った因縁……。その全てが鏡子には解せない。

理不尽さと疑問、そして混乱が鏡子を襲う。

「はあ、あう……ん、あ……くう……」

ただでさえ事態を飲み込めずにいるのに、

こうして子どもたちの前で男に身体をもてあそばれている――。

素肌に触れられた経験すらほとんどない鏡子は

男の手をどうしても意識してしまい、ますます混乱する。

「ん……ああ、はあ……っ」

指が巧みに動き、さらしの上から胸の先端を刺激してくる。

すると身体全体から力が抜け、

膝が笑ってしまう自分の感覚を鏡子は信じられなかった。

モクモク

モクモク

フフフ…
ついに感じてきたか？

ば…バカな！
何を言ってる…！

分かるぞ
お前の呼吸を見ればな

この8年間…
いろいろ研究も
修行してきた…
だから分かる

すべては
お前に恥を
かかせるため…

あのと時のオレが
味わった以上の
屈辱をな…！

もぞ
もぞ

「はあ、あ、く……ふあ、う……！」

もう呼吸を整えるどころではなかった。
立っていることすらできず、その場に崩れ座り込んでしまう。

「鏡子先生！」

子どもの声が耳に入ると我に返る。

「あ……う……」

しかし身体を起こすことすらできない。

(どう、して……こんなの、おかしい……！)

今まで味わったことのない感覚に鏡子は翻弄されるばかりだった。

「ほらほらもつとしつかりしないと… 鏡子センセイは強いんだろ？

こんなふうに使われてたら子供たちの夢を壊すことになるぞ？」

「く……！」

鏡子の敗北はもう明らかだった。

「ククク……さあ、ここからが本番だ」

言葉と共に男は再び鏡子の股間へと手を伸ばす。

「な……そこ、あ……」

男の指はあくまで優しく、下着のうえから鏡子のそこに触れた。

「く……う……っ」

いったいどうなっているのか、

男によつて巧みに身体を固められてしまつて抵抗することができない。

「やめ、あ……ん、うあ……！」

ゆつくりと上下に指先が動く。

自分でもほとんどさわつたことのない場所を触られている——

それだけで皮膚があわだつた。

「はあ、あ、はあ……」

けれどそれだけではない。

イヤでイヤで仕方ないはずなのに、頬が上気して息も荒くなつてしまう。

下腹の奥に熱い塊のような妙な感覚が生まれ、

それがぞくぞくと背筋を震わせる。

いったいこれからどうされてしまうのか……

鏡子の胸のなかにいやな予感が広がる。

「もつと子どもたちにも分かるような恥辱を与えてやろう」

「……！？」

男の指が鏡子の上着にかかる。

彼のやろうとしていることは鏡子にもわかつた。

(でも……これはチャンス……！)

フツ……
せつかく身体の自由を
取り戻したのに
そんな姿勢じゃ構えも
呼吸もあつたものじゃないな
どうした？

もう降参か？

卑怯な……！
子どもたちの前で……
こんな……っ

いい格好だ
だが……オレの
味わった恥辱は
こんなことでは
済まされない

まだまだだ……
もつと恥ずかしい目に
あわせてやろう

「く……っ」

「ほう。さすがだな。少しでも隙を見せるとこうなるわけか」
上着は取られたが、鏡子自身は男から逃げ出すことに成功していた。
拘束はなくなり、一応自由に動くことはできる。

……胸を隠すことをやめれば、だが。

「鏡子先生！？」

「せんせい……裸だ」

「うわあ……」

子どもたちが感嘆の声をあげる。
男の子なら、そろそろ雑誌の表紙のグラビア写真に興奮を覚え始める年代だ。
写真のような、いやそれ以上に美しい鏡子の半裸に
顔を赤くして見入っている。

「……ッ」

子どもたちの目には幼いながらも“男”の気配があつた。

鏡子は武道に秀でていたためにずっと異性からは距離を置かれてきたし、
鏡子自身もそれでいいと思っていた。

だから今のような視線で見られることには全く慣れていない。

子ども相手に怒ることもできず、ただ自分の胸を隠して立ちすくむ。

（誰なの？ 私が恥を…… いったい何のことなの？）

「まだ思い出さないか？ 火浦鏡子……」

8年前……後牟田公園でのあの出来事を……

（8年前……？ 後牟田公園……）

鏡子の記憶の隅に何かひっかかるものがあつた。

（そのとき私は15歳……いったい何が……）

後牟田公園、という場所には何か思い当たるふしがある。

この道場からもほど近く、中高生時代には通学路にも使っていた。

「まあゆっくり思い出すといい。時間はたっぷりあるからな」

言つて、男が近づいてくる。

「く……」

すり足で一步後ずさる鏡子だが、
それは戦うために間合いをあげたのではなかった。

男に気圧され、また子どもたちに見られているという羞恥心によつて

とにかく距離をあけておきたかっただけだった。

そんな鏡子の心理の隙をつき、男は一瞬で背後にまわりこむ。



「きゃー!」

男は後ろから手をまわし、鏡子の両手をとった。そして背から体重をかけて鏡子を床へ倒しこむ。

「あ……ぐ、う……っ」

男は的確に関節をおさえ、それ以上鏡子が動けないようにする。

「本当に覚えていないのか？」

確かに、『やられたほうは覚えていてもやったほうはすぐ忘れる』などというが。ククク……」

「……ッ」

男は暗い喜びに満ちた笑みを浮かべつつ鏡子を完全に押さえつけた。

素肌を完全に冷たさがしみる。

「8年前のオレも、こうしてあなたにおさえつけられたな」

(8年前……おさえつけた……?)

ひっかかっていた刺がすっと抜けるように、

鏡子の記憶のつかえがとれる。

そう、近くの公園で。

あれは鏡子が中学三年生のとき。確かに8年前――。

「まさかあなたはあの時の……」

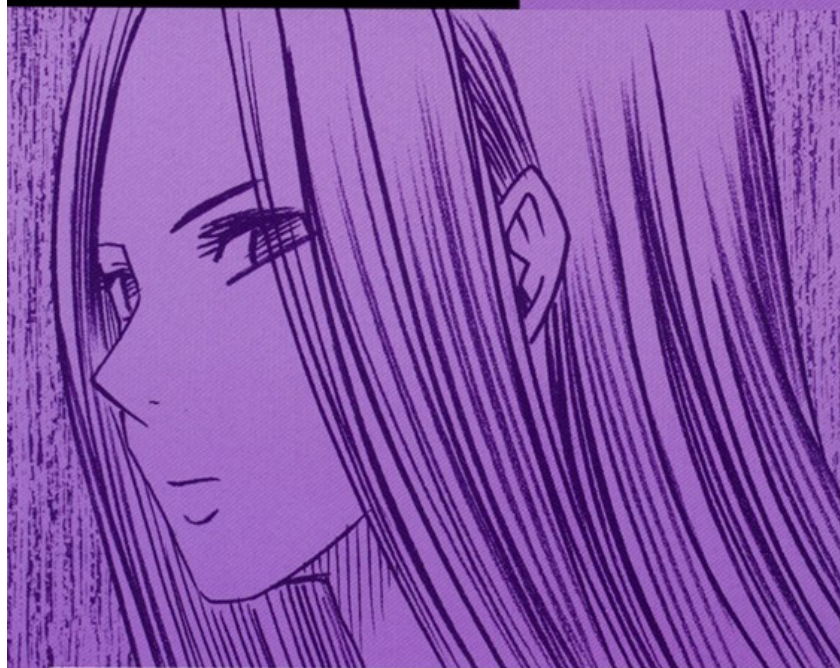
「……思い出したようだ。オレの名前は鬼塚シユウ……」

8年前、アンタにポコポコにされた小学生だ」

8年前——そのときが来るまでは、鬼塚シユウは小さな王様だった。むろん、しょせんは小学生の話だから、大人の男が本気で来ればかなわなかっただろう。だがシユウは狡猾で、かなわない相手の前ではおとなしく振舞った。裏ではいじめの首謀者、暴君として君臨しながら、大人たちの前では目立たずやり過ごしていたのだ。だが、後牟田公園で“そのとき”がやってくる。公園で同級生の女子をいじめていたところに、15歳の火浦鏡子があらわれたのだった。



鏡子はシユウの行為を咎めた。男なら弱い物いじめをするなど。シユウは鏡子の容姿を見て値踏みをして、“勝てる相手”だと踏んだ。自分より背は高いが、大人ではないし、腕や脚は細いし、何よりも“女”だったからだ。シユウは反抗し、鏡子に拳をむけた。鏡子の腹に自分の拳が食い込んで良い音を立て、さっきまでいじめていた女子のように鏡子が泣き出すはずだった。その怜悧な美貌が崩れるさまを見て勝利と力に酔えるはずだった。



だが現実とは違っていて——
気がつくともシユウの視界の天地はひっくりかえっていて、
地面に背をつけてしまっていた。
火浦流の古武術の技によって投げられてしまったのだ。
シユウは怒りと悔しさに燃えた。

『女に負けるはずがない』

それから体力が尽きるまで、

何度も何度も鏡子に殴りかかった。

しかし一度として鏡子に一撃を加えることはできず、
投げられ、足をかけられ、腕をとられ、

簡単にあしらわれ続けた。

ついにシユウはボロボロになり、

地面に倒れ伏して膝をつく。

最後に見たのは、

哀れみを含んだ視線を自分に送る鏡子の横顔だった。

それが鬼塚シユウにとって

人生最初の敗北の瞬間、屈辱のとき。

以来、シユウの脳裏にはその記憶が

ずっとこびりついている。

この8年間
どうやって
アンタを陵辱するか…

どうすれば一番
恥をかかせることが
できるか…

毎日
そればかり
考えてきた

今日でおそらく、シユウの人生最初の敗北は、

同時に人生最後の敗北にもなるだろう。

シユウは勝利を確信しながらもけして油断はしない。

鏡子を周到におさえつけたまま、胸のさらしを一系列はずした。

「……！ やっ！」

シユウの手の下で鏡子の体温が少し上がる。

「この8年間、どうやってアンタを陵辱するか……」

言いながらまたさらしを一系列はぎとる。

「どうすれば一番恥をかかせることができるか……」

また一系列。

「毎日そればかり考えてきた」

「く……」

さらしをはぎとることに鏡子の体温が上がり、

羞恥を感じているのがわかった。

それはシユウにとって喜び以外の何ものでもない。

「やめ……く、あ、はあ……！」

鏡子が少しでも抵抗の気配を見せれば力でもっておさえつける。

サディストのシユウに一切の躊躇はなかった。

さらしはもうほとんど剥がれている。

子どもたちのほうからも、鏡子の胸の先端までもが見える頃だろう。

「せ、せんせい……？」

「すげえ……」

子どもたちの反応、表情が変化している。

男たちに囲まれる恐怖も、

鏡子を応援しようとする純粹さももうそこにはなかった。

驚きと——鏡子の“女”の裸を見ることがへの興奮が見て取れる。

頬を赤くし、興味津々の目で食い入るように

鏡子の肢体を見つめている。

シユウは子どもたちのほうへと目配せしてから、

さらしを全てはがしにかかった。

ペリペリと小気味いい音と共に白いさらしよりも白い柔肌と、

その先端の桜色が露になる——。

「……ッ！」

見ろよ 鏡子先生？
あの子供たちの表情…

はじめは鏡子先生が
勝つことを
期待していた子供たちが
今ではどうかな？

強い強い鏡子先生が
もつと恥ずかしい目に
あうことを
期待しているんじゃないか？

な……
何をバカな……！！



鏡子は自分から床に伏せ、へばりつくことで胸を隠した。

「ククク……どうした？ そんな格好じゃ反撃なんてできやしないぞ」
「……子どもたちの前で……こんなことをするなんて……！」

鏡子にまだ反抗の意志は残っている。

けれど、その体勢では戦っているとはとても言えない。

シユウは鏡子が動けないのをいいことに、余裕でその身体を撫で回す。
むき出しになった肩と背中を指が這った。

「ん……く、うう……！」

「ほう。なかなかいい感度じゃないか」

「ッ……！！」

ソフトタッチでつつつと背中をなぞると、

鏡子の身体が左右にびくびくと動く。

すると、子どもたちの視線に更に熱がこもった。

「み、見ちゃ、ダメ……！」

「何を言ってるんだ。お前が見せてるんじゃないか」

「ち、ちが……はあ、あ……」

シユウはさらに凶に乗り、鏡子の尻をなでまわす。

「ほう、く……うう……」

柔らかなその感触をたつぷりと楽しんだ後、手はさらに前へと移動し――。

「……」

鏡子の秘所に触れた。

服の上からとはいえ、

誰にも触られたことのない場所を触られる屈辱に鏡子は身震いする。

しかも子どもたちが見ている前で――。

「はあ、あ、はあ……」

鏡子の背がじつとりと湧き出した汗で光る。

オスの圧倒的な気配が自分の上に乗っていることを認めざるを得ない。

「く……ふあ、う……」

子どもたちもまた、そのオスとよく似た気配を

発し始めていることにも気付かざるを得なかった。

（そんな……どうして、あんなに可愛い子どもたちが……）

「ククク……男っていうのはどんなに幼くても、

いつでも支配できる女を探してるんだ。

もう、あいつらの前で先生ツラすることは一生できなくなったな」
子どもたちはもう、全く遠慮のない視線で鏡子を見つめていた。



「それじゃあ子供たちの期待通り...
もっと恥ずかしいところをさらけ出すんだな」

「い、いやあッ!」

シユウは袴に手をかけ、それを一気に引きずりおろした。

「やめ……て、あ、やあ……!」

大した抵抗もできないまま鏡子は下半身をも露出させてしまう。

「ずいぶんと古風な下着だな」

シユウは興味深そうに笑い、鏡子のふんどしに触れた。

「残念だったな、お前たちの鏡子先生の下着に色気がなくて」

急に話しかけられて子どもたちはぎくりと後ずさる。

けれど、シユウがそれ以上何もしなかつもりだとわかると、

また食い入るように半裸の鏡子に視線を写した。

すらりとこのびた脚、そしてその付け根の布地に視線が集中している。

「だ、ダメ……!見ないで!」

「ハハハハ! 子どもの目は正直だな!」

言いながら、シユウは鏡子のふんどしに手をかけた。

「ふざけないで!」

一瞬の間を見つけて鏡子はシユウを跳ね飛ばす。

そのまま反動をつけて何とか立ち上がった。



「はあ、はあ、はあ……」
立ち上がった鏡子だが、

シュウに睨まれるとその場から一步も動けなくなる。
「う……………」

おまけに子どもたちの視線が突き刺さり、
半裸の身体を隠さざるを得ない。

両手を封じられたも同然だった。

床に伏せていたときよりも強く視線と羞恥を感じてしまい、
脚がかくかくと震えてくる。

「ククク……」

鏡子が立ち上がった後もこうなることはわかっていたのだろう、
シュウは余裕の笑みを浮かべ、ぼつぼつと語り出す。

「そうそう、いいことを教えてやろう」

「あのおとき公園でお前が助けた小学生の女……」

あいつは実はオレのことが好きだったらしくてな……

高校のときはつきあったりもしたんだ。

SMプレイでさんさんののしませてもらったよ」

「……………」

「分かるか？オレの言いたいことが……」

「……………あなたの性癖なんて、興味ないわ」

「じゃあ火浦鏡子、おまえ自身の性癖はどうなんだ？」

「そんなこと、あなたに関係な——」

強がる鏡子にシュウは一步近づく。

すると鏡子の口は止まり、シュウから逃げるように一步後ずさった。

「どうした？」

「……………」

「ククク……あのおときのお前は、

実はオレにいいじめをやめさせたかったんじゃないだろう？」

「え……………」

「オレがいじめてたあの女子に、嫉妬してたんじゃないか？」

「は……………」

意味がわからない——。

けれど、鏡子の頭のなかで、何かがぼちんとはまり、つながる。



シユウはまた素早く鏡子の背後へとまわり、袴の帯でその手をとった。

「い……や、ああ……！」

胸部を隠すものがなくなる。

「やめ……あ、だめえ！ みないで！」

シユウは鏡子を羽交い絞めにして、

その美巨乳を子どもたちのほうへと見せつけた。

「ひ……く、うう……ッ！」

更に鏡子の身体を左右に動かし、胸を奮わせる。

「や、いやあ！ ひ……うう、はあ、あ……ああッ！」

柔らかく豊かなそこは自在に形を変えながら

左右にぶるぶると動いた。

（す、スゲー！）

（鏡子先生のおっぱい……おっぱいが……）

（やわらかそう……）

子どもたちが鏡子の裸体に反応を示す。

「こんな……はあ、あ……恥ずかし、すぎる……！」

子どもたちは鏡子の胸と表情を交互に見る。

あるいは胸以上に、鏡子の表情は興奮を誘うものだった。

「世の中には攻める人間と 攻められる人間がいる

オレは誰でもいじめてるわけじゃない

攻められて悦びを感じる人間……

オレはそういう獲物を選んで遊んでいる」

「か、勝手なことを……！」

鏡子は羞恥に耐えながらなんとか逃げだそうと身体をひねる。

しかしその動きは子どもたちを喜ばせるだけだった。

シユウが手首を巧妙にコントロールし、

上半身を揺する以上の自由は与えない。

この状況で
この反応…

やっぱりお前は
オレの思ったとおりの
女のような

教えてやるよ
攻められる側の
女の悦びを…!

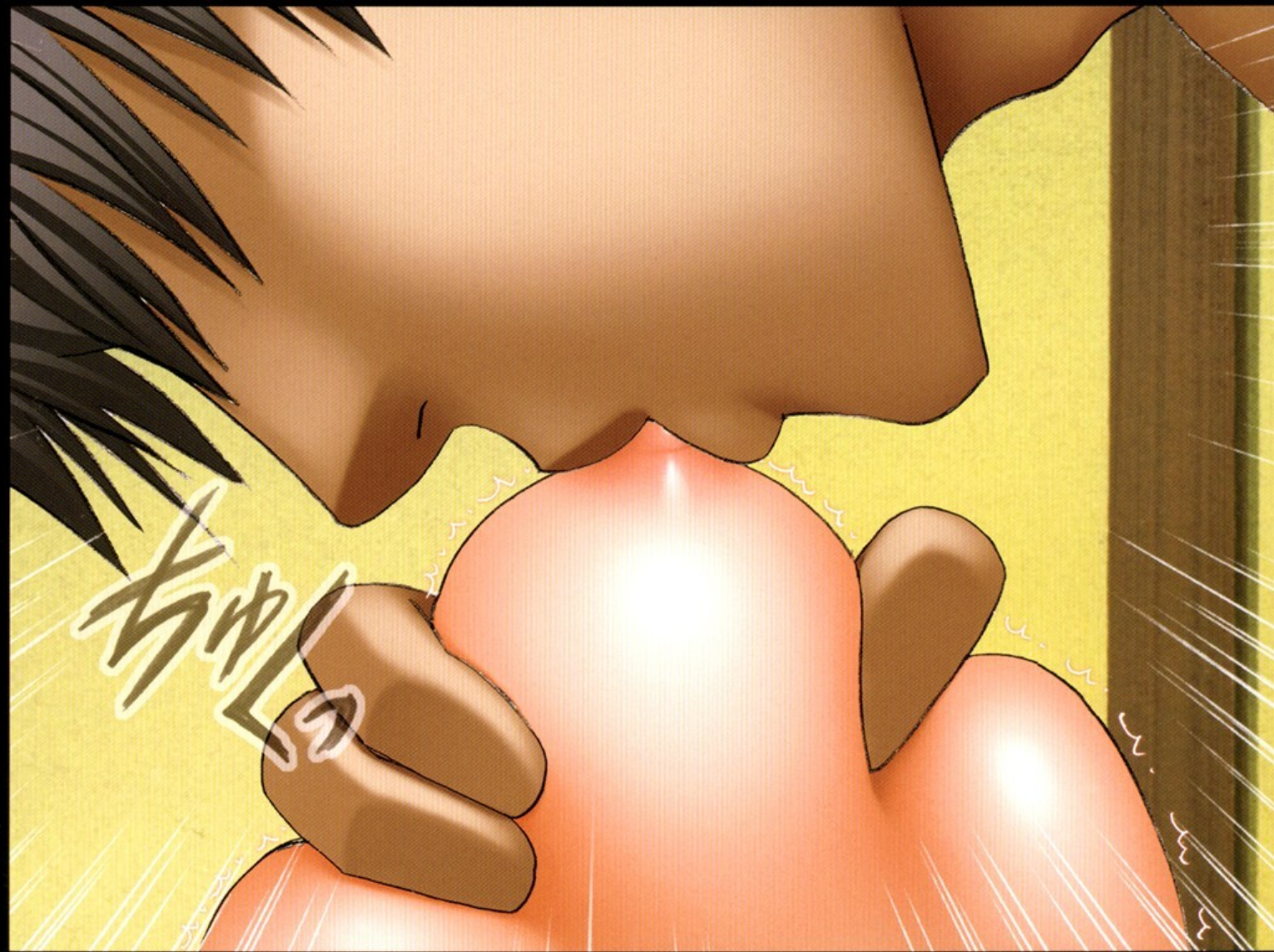
「オレが見る限り
アンタは攻められる側の人間だ。
その人間がオレを地面に這いつくばらせた……
その事実が許せなかった。
だからオレは何としてもアンタに復讐しなくてはならなかった」
シユウは子どもたちの見ている目の前で、鏡子の股間に指を這わせる。
柔らかなそこは男の指を受け入れ、下着の布ごとゆっくりと沈み込む。
子どもたちから見ても、鏡子先生の——
女の、自分たちとは違うところを
指が蹂躪するのがはっきりとわかった。
「感じてきたようだな」
「な、何を……！」
強がってはいても鏡子の肢体はうっすらと汗ばみ、
独特の色気と女の香気を発し始めている。
脚は細かく震え、シユウの指が股間に食い込むために
ひくひくと全身がひきつった。
「あ……はあ、う……くう、うん……！」
秘所をまさぐる指がじつとりとした湿り気を感じた。
それはまだ「汗」という言い訳のきくほどのものだ。
微量で、指先にべっとりつくようなことはない。
だがその粘り気と熱が、けて汗ではないことを伝えてくる。
鏡子の性感は確実に高まっていた。
シユウは確信する。
火浦鏡子は自分が思っていたとおりの女だったと——。



さあ
子供たちにも
見せてやろうじや
ないか

強い者が
より強い者に
もてあそばれる
陵辱シヨール

「オレが上でアンタが下...」
これでようやく本来の立ち位置に戻ったな」
シユウは鏡子の手を封じ込めつつ、上半身を体重で押さえこむ。
いわゆるマウントポジションだった。
「く……う……」
息苦しいが、鏡子にはもはや何もできない。
男の体重を跳ね飛ばすほどの筋力は元々ない。
動きのなかで相手の力を利用する古武術の技は、
こうして完全に押さえ込まれると効果は半減してしまう。
(息が……う……)
おまけに肺を圧迫されているせいで呼吸を整えることもできない。
「はあ、あ、はあ……う、ふう、く、は……」
「諦めろ。オレの勝ちだ」
シユウは言い放ち、鏡子の胸を下から持ち上げるようにもむ。
「あ……や、あ……」
何度か丁寧に揉み込んでから、胸の先端を指でつまんだ。
「ひう!？」
「さらしなんて巻いてるわりには形は崩れていない……」
「ここも綺麗な色じゃないか」
「う……く、はあ、あ……!」
こりこりと指で乳首を擦る。
既に固くなりかけていたそこは、
シユウの愛撫に敏感な反応を返した。
「は、や……う、あ、うう……!」
指のなかで徐々に乳首が固く大きくなっていく。
「身体は正直だな」
「ち、ちが……う、はあ、い……んう!」
(胸をいじられるだけで……こんな……つ)
鏡子の脳裏でちかちかと白い光が散り、身体の奥に熱がこもる。
「あ……い、や……!」
首を振り、全身を動かしてその未知の感覚を外に逃そうとする。
だが、シユウが完全に押さえこんでいるためにどうにもならない。
「はう……ん、はあ、ああ!」
身体の奥から高揚していくようなその感覚を
全身で受け入れるほかなかった。



鏡子の豊かな胸をつかみ、その先端に顔を近づける。

「な、なにを……あ、は、くうん！」

シユウは何の躊躇もなく鏡子の乳首を口に含んだ。

「ん、や、あ……はあ……！」

舌で転がしつつ強く吸い上げていく。

「あ、はあ、やあ……あ、あああっ！」

子どもたちが見ているのを意識しながら

鏡子はあられもない声をあげてしまっていた。

「はう……ん、やあ、はあ、あく……んう、うううう！」

強く吸われると自然と声が上がってしまった、

全く我慢することができない。

吸っているのは赤子でもなんでもない、大の男。

子どもが見ている前で成人した男に乳を吸われている——

その意識が鏡子に倒錯した快感をもたらす。

「や……あ、だめ……みちや、だ、めえ……っ」

「違うだろう？ 本当は見えて欲しいんだろう？」

「え——」

「あいつらに見られてるから、

声を我慢できないほど感じてるんだろう？」

「ち、ちが……うう、あ、はあ……やあ、いやあ！」

否定しつつも鏡子にはシユウを拒否する気配はなかった。

胸を吸うなどという無防備な姿で後頭部をさらしているというのに、

反撃することはもう全く考えることができずにいる。

「はあ……う、や、ああ……！」

快感を得てしまっていることは事実で、

それをどうしのいで処理するか考えられない。

与えられる快感自体はもう無視することができなくなっていた。



いや……
そんなところまで
子どもたちの
前で……!

「次はここだ」

鏡子が抵抗できないのを見越して
シユウは今度は下半身に顔を近づけた。

「な、なにを……」

「そろそろ胸だけじゃ物足りなくなってきた頃だろう」

「いや……わ、わたしは……! そんな場所、あ……やあ!」
吐息がかかるほどにシユウの鼻先が近づく。

（いや……そんなところまで、子どもたちの前で……!）
シユウの指がそこをくにくにといじる。

ひとしきりふんどしの布地とあそこをなじませてから、
舌を伸ばした。

「ひあ……!」

生地越してはあるが、ぞわりとしたあたたかさが股間を這う。
じつとりと濡れた舌の感触が伝わってきた。

「いや……はあ、ああ……だ、めえ!」

子どもたちは初めて見るその行為を
食い入るように見つめていた。

汚いはずの場所に顔を近づけ、舌で触れる。

しかも——鏡子はその行為に喘いでいる。

皆、顔を真っ赤にしながら異常な興奮を覚え、

徐々に鏡子のほうへと近づいてきていた。

シユウもその仲間もあえてそれを止めることはせず、
近くからたっぷりと見せつける。

「や……はあ、あ、う……くう……!」

脳裏でちかちかとまたたく白い光が

鏡子の意識を徐々に塗りつぶしていく。

白い太股に朱がさす。

「はあ……あ、く……あ、はあ、はあ……っ」

鏡子の息は荒くなり、

次第にシユウが与えてくる刺激を待ち望むようになっていた。

ほらガキども？
鏡子先生の
一番恥ずかしいところ
見たいか？

だ…ダメッ！
みんな！
見ちゃダメ！

そんな場所からじゃ
よく見えないだろ

ほら
もっと近づいて
よく見てみる

「ほらガキども？鏡子先生の一番恥ずかしいところ 見たいか？」
「え——」

シュウの声で鏡子のはつと我に帰る。

「そんな場所からじゃよく見えないだろ。」

ほら、もっと近づいてよく見てみる」

「う……」

子どもたちは股間を抑えつつ、鏡子とシュウを交互に見る。

「だ…ダメッ！みんな！見ちゃダメ！」

「ククク……心配するな。」

鏡子センセイは本当はお前らに見られたがつてるんだ」

「な……ち、ちが、やめ……はなし、て……！」

子どもを使つて挑発され、さすがに鏡子も抵抗を再開する。

だがシュウはもがく脚をがっちり決めておさえつけた。

「い……やあ、はあ、う……くうう！」

「お前らも見たいんだらう？ 遠慮するなよ」

「……ッ」

子どもたちはごくりと生唾を飲み込む。

シュウに鏡子の股間を見せつけられ、

もうそこから視線を外せなくなっていた。

「そう。子どもはそうやって素直にしてればいいんだ」

「いや……だめ、！ みんな！」

だ、あ……め、うう、く、はあ、はあ……っ」

鏡子が制止の声をあげてももう子どもたちは聞かなかつた。

無言で股間を凝視している。

「では」開帳といくか」

シュウはふんどしに手をかけた。

「あ……や、はあ、だめ……」

ゆっくりともったいぶって子どもたちを煽りつつ、

白いそれを解いていく。

「だめえ……みちや……や……ああ……」

鏡子はシュウに脚をおさえられ、

ただ無力につぶやくほかなかつた。

ガキども
ここに穴があるのが
わかるか？

ここに
チ○コを突っ込むのが
セックスだ

この子たちに
そんなこと……
教えないでッ……

あぁッ!!

ただ……
この穴にすぐ
突っ込むのは
無粋だ

指や舌で
十分ほぐしてから入れると
男も女も
気持ちよくなれる

今からそれを見せよう

ヌル
ヌル

ッッッ

「う……はあ、あ……ああ……」

子どもたちの目の前でついに鏡子の秘所があらわになる。

「さあ、よく見てやれ」

シユウは容赦なく鏡子のそこを指で押し広げた。

「いや……やあ……!」

「どうだ？ 濡れてるのがわかるだろう」

子どもたちが誰ともなくうなずく。

確かに鏡子のそこは透ら透らと濡れ光っていた。

「感じている……気持ちよくなってる証拠がこれだ。覚えておけ」

「あ……ああ……」

無力感にうちひしがれる鏡子。

だが、そうして屈辱を感じれば感じるほど

分泌される愛液も多くなる。

「どうした？ 子どもたちに見られて、どんどんあふれてきてるぞ」

「や……いや、うう……」

鏡子自身にもわかっていた。

こうして恥ずかしい姿をさらし、

嫌で嫌で仕方がないはずなのに、下腹の奥のうずきが止まらない。

熱いものがあふれ、太股を伝って下の床まで濡らしていく。

「ガキども、ここに穴があるのがわかるか？」

「……」

シユウが指で押し広げ、鏡子の秘裂を見せつけた。

「ここにチ○コを突っ込むのがセックスだ」

「この子たちにそんなこと、教えないでッ!」

シユウは無視して続ける。

「ただ……この穴にすぐ突っ込むのは無粋だ。

指や舌で十分ほぐしてから入れると、男も女も気持ちよくなれる」

「く……ッ」

「今からそれを見せてやろう」

鏡子の秘所に指を伸ばした。



子どもたちは夢中になって鏡子の股間を見つめている。シユウは彼らに一度指を見せつけてから鏡子の秘所をいじり始める。

くちゅ、くにゅ——。

既に十分に濡れていたそこは、指が軽く往復するだけで卑猥な音を立てた。

「あ……う、くう……い……」

上下に指先をゆっくり動かし、媚肉の柔らかさを堪能する。

陰唇が愛液と共に指にまとわりつく光景は

鏡子自身の目から見ても卑猥だった。

子どもたちに見せつけられ、また自分自身も見ることを強要され、こんなにも濡れてしまっている——。

（イヤ……イヤなのに……！）

鏡子の胸の奥で戸惑いと興奮がうずまく。

この異常な状況を意識すると、

胸が切なく絞めつけられてしまうのだった。

「はあ、あ……はあ、うう……！ や、あああああつ！」

シユウは指をゆっくりと秘裂の淵に這わせた。

「あ、ひ、やああ！」

時折親指でクリトリスを刺激しつつ、

人差し指と中指でゆっくりと膣口を押し広げる。

「いや……あ、はあ、んふあああ！」

ちかちかと眼の奥で光が散る。

「思ったよりずいぶんとほぐれてるじゃないか」

「ひ——あ、はあ、あああああ！」

シユウが手にわずかに力をこめると、

鏡子のそこは二本の指を簡単にくわえこんでしまった。

「ん、ふあ、あ、だめ……くる、何か……」

ク、る、う……あ、はあ、あああああああつ——！」

鏡子の膣口がきゅつと縮まって指を締め付ける。

それと同時に全身ががくがくと震え、

どくどくと大量の愛液があふれたした。

「あ……ああ……ひ、う……く……はあ、はあ、はあ……」

（何……何なの、この感覚……）

鏡子は目を潤ませてシユウを見上げる。

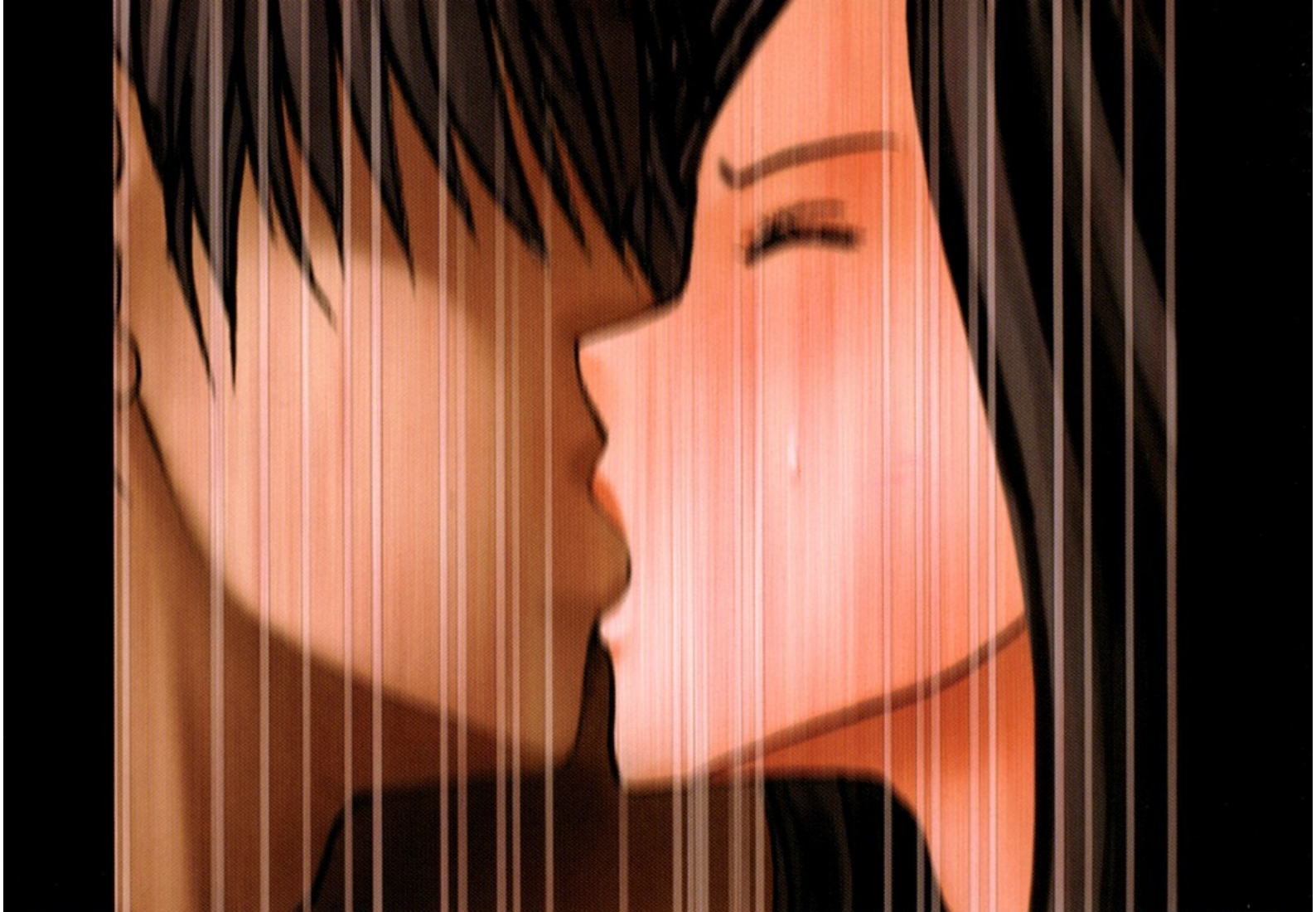
彼女が初めて感じた絶頂だった。



ダメ……頭のなか
ぼーっとして……

イヤなはずなのに……
どうしてこんなに……
キスがきもちいいの!?

「ほう……まだ頑張るのか。いい加減大人しくしたらどうだ?」
「う……誰が、あなたなんか、に……はあ、ああ、や、つううん!」
完全に負けたことも、無理矢理されて
快感を感じてしまっていることは自分でもわかっている。
けれど、それでもシユウの行為そのものを
子どもたちの前で認めることはできない。
「往生際の悪いやつだ」
「く……ん、んん!?!」
一言つぶやいてシユウは鏡子の口をふさいだ。
「んんう!?!」
ゆるゆると腰を動かし、挿入を続けながら唇と唇をねっとりあわせる。
「ん、ふ……あ、あむ、ん、んむう……!」
シユウは何も特別なことはしていない。
ただ唇を合わせ、時折舌を鏡子の唇や口内に這わせていただけだ。
だが——徐々に鏡子の反応がおとなしくなってくる。
「はあ、ん……ん、ふう……ん、む……ちゅ……」
やがて顔を背けるようなことはなくなり、
無防備に唇をさらし、合わせ、男に応える。
「ん……ちゅ、ふあ……んむ、ほう……ちゅ……」
「ダメ……頭のなか、ぼーっとして……」
口内がとけ合う感触と、秘部の粘膜がこすれ合う感触が混ざる——。
「ん!?! ん、ふあ、はあ、あむ……んちゅ、んう、くううん!」
シユウは全く唇を離すことなく、
肉杭で鏡子の最奥をリズムカルに突き続けた。
「はあ、あ、んむ……ふあ、はあ、ちゅ……んむ……!」
男の舌をペニスでねじこまれ、唾液を無理矢理飲まされる。
「イヤなはずなのに……どうしてこんなに……キスがきもちいいの!?!」
口内と膈内を同時に責められる感触に鏡子の理性は完全に蕩けた。
子どもたちに夢中で見られていることを感じながら、
キスと挿入の両方の快感に意識が飲み込まれていく。
「ん……う、はあ、ああ、んく……ん、ふああ
ああ、はむ……ん、ちゅ、ん、んううううう!」
絶頂の瞬間——。
鏡子は自分からシユウの唇を求めて押し付けていた。



「あ……はあ、あ、う、うう……っ」
鏡子は男に身を任せ、自らその広い背中をゆるく抱いている。

「はあ、う、ん、や……あ、はあ、はあ……」
もうその両手は縛られていない。

そして、鏡子に抵抗の意志も残っていなかった。

このままじゃいけない、男のされるがままになってしまっただけじゃない。
そんな想いもちらちらと脳裏に浮かぶ。

けれど、快楽と支配される喜び、

強いものに組み敷かれる快感が全てを押し流してしまう。

「だいたふ素直になっただじゃないか」

「う……はあ、はう、ん……う、くう……っ」

この男、シユウのことはぜったいに好きになれない。

だけどそれなのに——どうして自分はこんなにも感じてしまうのか。

(やっぱり、私はこんな風にされることを望んで……?)

違う、と否定する自分もいる。

でもその声はいつしか弱く小さくなってしまっていた。

「う……く、はあ、あ……はあ、う……」

シユウが腰を揺ると鏡子は切ない声をあげた。

「そろそろ女の喜びを叩き込んでやるか」

おもむろに言い、ぐいぐいとペニスを最奥に押し付ける。

「ひ!? はあ、あ……く、う、あ……」

二度の絶頂をへて鏡子の膣内は優しく柔らかくシユウのものを受け入れる。

膣壁は雁首と裏筋にねっとりまとわりつく。

ピストンするたびにあふれる愛液と媚肉のあたたかさは最高の美酒だった。

シユウは勝利に酔いながらぐりぐりと鏡子の身体を突き回す。

「あ、はあ、や……それ、だめ……うう、くう、んう！」

「そろそろイクぞ……」

鏡子の身体をきつく抱きしめて固定し、コツコツと奥を細かく突いた。

「んう、はあ、あ……や、めえ! ん、ふあ、はあ、あう……」

んん、くう、あああつ!」

そして最後の瞬間——。

一瞬だけ唇と唇をあわせる。



ああああ
ああッ!!

「ちゅ、んんううむ!?!」

どく、どぶ、びゅく——!

きゅつと締まった腔内に、シユウは大量の白濁を吐き出した。
鏡子の子宮口にベニスの鈴口を押し付け、余すところなく奥に注ぎこむ。

「ふぁ……ああ、あ、は——ん、あつ、い……っ」

断続的な絶頂。

唇を合わせた快感を反芻しながら、鏡子は腔内射精で静かに三度目の絶頂に達した。

「あ……はぁ、あう、ん……はぁ、はぁ……」

ぐったりと力の抜けた身体をシユウに預ける鏡子。

(確かに私は……こうなることを……)

挿入されたままの秘部から白濁がこぼれ落ちた。

メイ編



彼女の名前はメイ。
オリンピック女子レスリングの
金メダリストである。

大富豪の令嬢で、
生まれた頃からなにひとつ不自由なく
暮らしてきた。

スポーツ愛好家である父親は、
メイの才能をいち早く見抜き、
スポーツのエリート教育を施した。
めぐまれた環境とめぐまれた才能――。

メイはまさに金メダルの栄冠を
勝ち取るにふさわしい人材だったのだ。

欲しいものは全て手に入れてきた
メイだが、そんな彼女でも一度しか
味わえなかったものがある。

それは、金メダルを手にした瞬間の
“高揚感”だ。

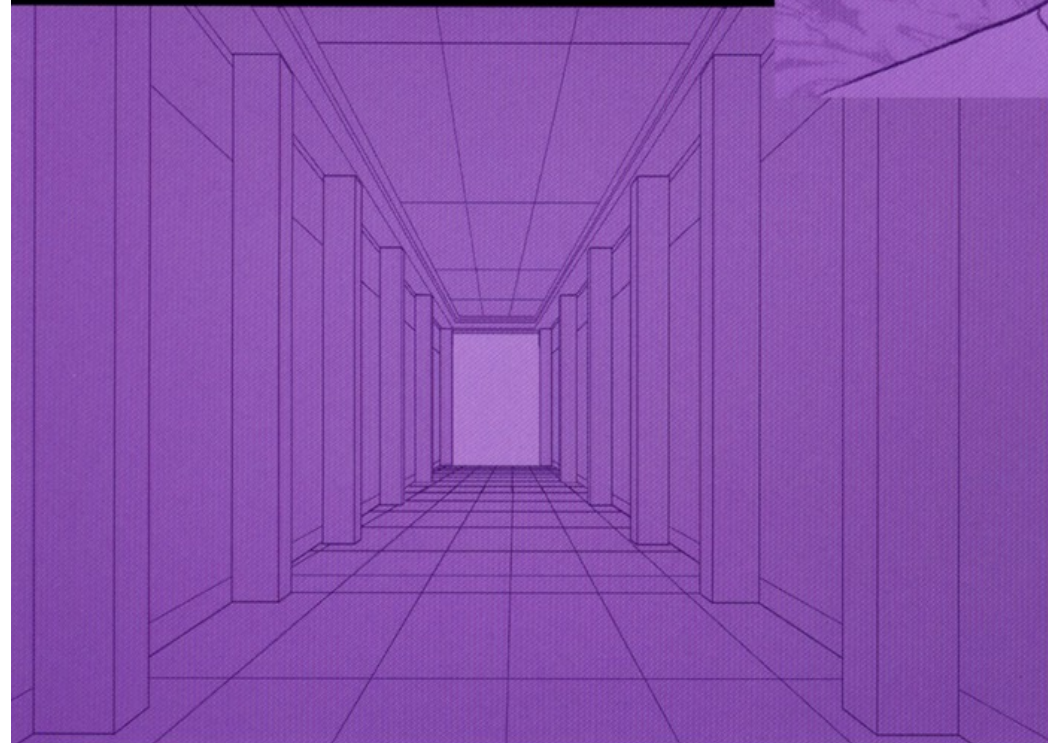
強い相手を倒し、
自分が名実ともに

世界一となったという興奮、
自分が世界に認められる瞬間、

それこそがメイが求めていたものだった。
再びあの高揚感が欲しい――。

オリンピック以上の高ぶりを求め、
メイはパパには内緒で

地下格闘技の世界へと乗り込んだ。



「い……いいんですかお嬢様……」

本当にこんな勝手なことをやって……」

メイの家の召使の一人で、

スパージングパートナーでもあるミカが不安そうに言う。

「いいのいいの 私はもつと欲しいのよ 刺激が……!」

「でも……危険ですよこんなの……地下格闘技なんて」

ミカのこととは嫌いではない。

けれど、心配性すぎるところが時折鬱陶しかった。

「だからこそいいんじゃない 危険だからこそね」

「お嬢様!」

メイは歩き出す。

一歩進むごとに全身を熱が包む。

身体の奥からあふれててくるそれは、

観客の歓声と怒号が近づいてますます膨れ上がっていく。

「危険な戦いでなければ味わえない高揚感……」

それがたまらないの!」

(これよ……この感じ!)

控え室から闘技場のホールへと向かう

長く細く暗い通路はもうすぐ終わる。

メイは想像する。

この地下闘技場で激戦のすえに屈強な相手を打ち倒し、

賞賛と栄誉を浴びる自分の姿を――。

(そう、私は確かにレスリングが好き……格闘技が好き!)

勝利を手にし、敵を足蹴にする自分の姿を――。

(それは、最後に勝つのはいつだって私だからよ!)

スポットライトを浴び、余裕の笑みを浮かべ。

メイは地下闘技場に降り立った。



リングに上がり、メイは対戦相手と対峙した。

メイの初対戦の相手は、地下格闘界の重鎮・ユーリである。

「いくらオリンピックメダリストだからと言って

総合格闘技未経験の女がいきなり挑んでくるなんて

地下格闘界もなめられたものね…」

これだから世間知らずのお嬢様ってやつは…」

ユーリの無骨な外見はメイとは似ても似つかない。

身体のあちこちにある傷跡がユーリの歴戦ぶりを物語っている。

それに比べるとメイの肢体は隔々まで美しい。

敗北から学んできた努力型の戦士と、

勝利しか知らない天才型の戦士の対照的なカードだった。

「フッフ…いいわね…そういう態度…」

レスリングじゃ、もう私にそうやってつかつかかってくる女もいないし

わざわざうさんくさい地下にきた甲斐があったってモンね」

どくどくと心臓が鳴り、全身をさらなる興奮が包んだ。

メイにも本能的にユーリが一筋縄ではいかなない相手なことはわかる。

だが、それでもメイは自分の勝利を信じて疑わなかった。

「READY?」

レフェリーが二人の間に割って入って確認をとる。

メイはセコンドに付いたミカを振り返った。

いつになく緊張した面持ち。

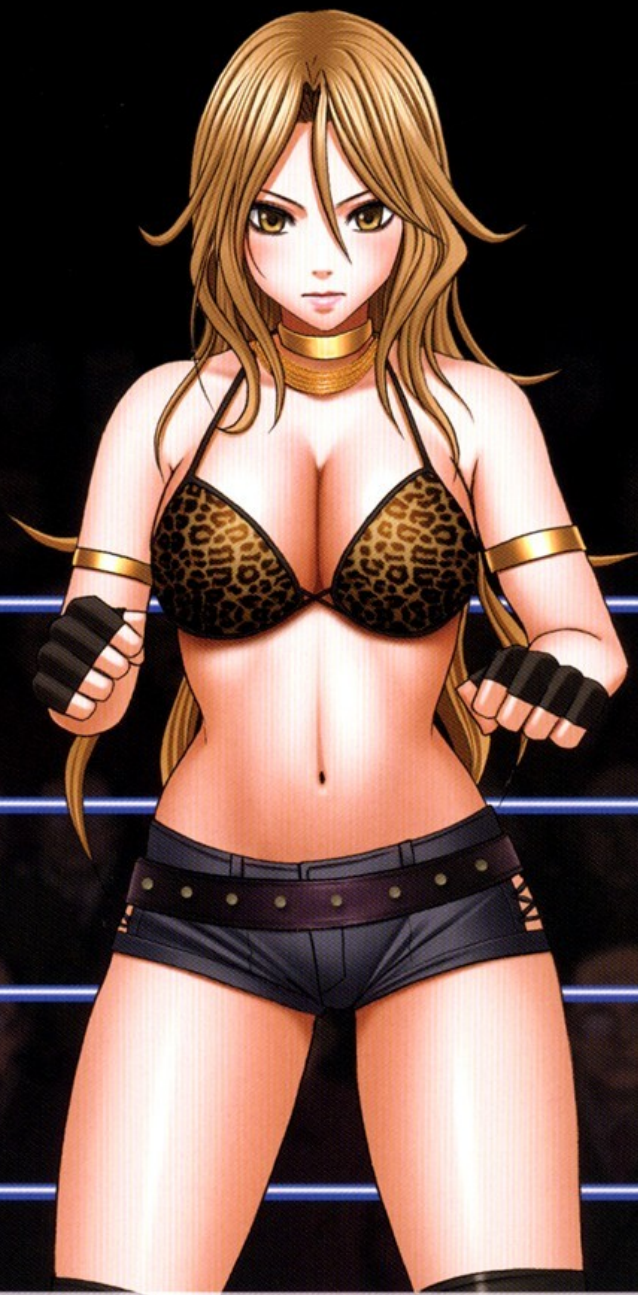
(そんな顔しちゃって…大丈夫、私は絶対勝つから!)

「準備オーケーよ」

「こっちもだ」

メイとユーリは拳を前につきだし、

一瞬だけ重ねて——試合が開始された。



先手をとったのはユーリだった。

「うらあ！」

たくましい腕から放たれたパンチがメイを襲う。

「……」

だがメイはそれを難なくかわした。

「つあ！ やあ！」

更にユーリは連撃を繰り返してくるが――。

(確かに食らったら痛そうだけど……遅いわね)

「はっ！」

「!?!」

メイはユーリの打撃をかいくぐり、

一瞬だけ間合いを詰めてジャブを打った。

「く……」

「打撃ってこういう感じかしら？」

メイのジャブはユーリの鼻先にクリーンヒットしていた。

「こ……のお！」

「ッ！」

力任せの一撃。すんでのところかわし、再びジャブを打つ。

「つつう！」

ユーリはまた鼻先にくらい、一瞬のけぞった。

だがそのまま痛覚を無視して膝蹴りを打ってくる！

「はっ！」

一瞬焦るメイだったが、やはりスピードでは完全に優っている。

ぎりぎりのタイミングで軸をずらし、

ユーリの膝蹴りを受け流した。

(やっぱり食らえば重いわね……)

受け流して微妙にしか当たっていかないのに、

痛みは決して弱くない。

(でも……このスピードなら、

まともに当たることは絶対ないわ！)

なめてはいけない相手だが、

負ける公算は万に一つも無かった。

メイは自分の優位を確信する。

そして軸をかわした姿勢のまま、

身体を半回転ひねって強烈な裏拳をユーリに叩き込む！



「ぐあー！」
なんとか手のひらでメイの裏拳を受けたユーリだが、
バランスを崩して大きくのけぞった。
(そこ！)

裏拳で身体をひねった勢いを利用して、
今度は回し蹴りを浴びせる。

ドゴ——！

会場全体にもはつきりと聞こえるほどの重い音。

「あがぁ……！」

息ができなくなったユーリがその場に膝をつく。

「ふん……地下格闘界って言っても

こんなものか……」

「くっ……！」

メイが専門としてきたのはレスリングだ。

だから本来打撃の技は鍛えられていないはず。

しかし、メイは初めて実戦で操る打撃で

歴戦のユーリを圧倒していた。

まさに才能の桁が違うのだ。

「やっぱり『地下』なんてこんなレベルなのね……」

一流選手のなりそこない……才能なき者達の溜まり場ね……」

メイは冷めた口調で言って、ユーリが立ち上がるのを待つ。

「思ったよりもつまらなかつたわ……」

もう終わりにさせてもらおうわね」

「くそおお！」

逆上したユーリが大ぶりの一撃を繰り出す。

体重と勢いが完全に乗り切った拳。

(当たるわけがないのに)

メイは冷静にバックステップした。

これが外れて完全にバランスを崩したところで

また一撃を加えれば、

ユーリはもう足元もおぼつかなくなるだろう。

もつとも効果的な攻撃にするためには、

どこに何を当てればいいのか。

パズルのように考えながら

ユーリの際だらけの肢体を眺めていたメイだったが――。

ちよつと！
何するのミカ！

はなしなさい！

フフフ…お嬢様…
もっと刺激が欲しいって
言ってたじゃないですか…

「!?」
突然身体の自由を奪われる。

「な……!?」
誰かがメイの身体を羽交い絞めにしたのだ。

「く！」
逃れようとしてもがっちり抑えられていて動けない。

ロープをはさんで後ろ、
セコンドに付いていた召使いのミカがメイを抑えこんでいた。

「ちよつと！ 何するのミカ！はなしなさい！」
スパーリングの相手を努めてきたミカだけに、

メイの動きの癖はよくわかつていた。
暴れて逃れようとしても的確に抑えこまれてしまう。

「く……う……」

（どうしてミカが……!?）
忠実な召使いで、話し相手や遊び相手にも

なってくれていたのに。
信頼していた相手の突然の行動に、さすがのメイも動揺した。

「フフフ……お嬢様……」
もっと刺激が欲しいって言ってたじゃないですか……」

「な、なにを……くう！」
ミカはさらにながらりと腕を固めた。

けして冗談でやっているわけではないことがメイにもわかる。
「ハハハ！ よくやったぞ」
皮肉っぽい笑みを浮かべたユーリがメイの前に立った。

フフフ……
こんな美しい“女”を
好きにできるなんて……
最高の喜びよ

ここは
格闘技をする
場じゃないの!?!?

アハハハ! そうよ
ただ……
地下格闘技っていうのは

正真正銘の
“なんでもアリ”なの
わかる?

ギンギン

「フフフ……悔しいけど認めるわ アナタの格闘技の才能……
それでもここは地下格闘技……
いくら才能があっても勝てないこともあるって教えてあげる」

「うあ……」

「ユーリが手を伸ばしたのはメイの胸だった。」

「な、なにをするの!?!」

「すぐにわかるわ」

「ユーリは含み笑いを漏らし、メイの胸への愛撫を続ける。」

「傷ひとつなくて形も良くて肌もすべすべ。」

「女なら誰もが羨む美貌ね」

「……ッ」

「格闘技の才能を持ちながら、女としての魅力にも溢れてるなんて、
全く嫉妬するほかないわ」

「ユーリの口調には暗い興奮がにじんでいる。」

「痛ッ……」

「ユーリがメイの胸をわしづかみにし、力任せにもみしだく。」

「あら、案外感じやすいのね。」

「その表情を観客にもよく見せてあげたらどう?」

「あ——」

「焦るメイの視界に、異様な盛り上がりを見せ始めている
観客席が映った。」

「ほうら」

「あ……んう!」

「今度は優しいタッチで胸の先端をいじる。」

「は……あ、や、やめ……くう!」

「へえ……うぶな反応をするじゃない。」

「何でも手に入るご身分だろうに。男遊びには興味なかったの?」

「ええ、お嬢様ったら本当に戦うことにしか興味がなくて。」

「ねえ?」

「きゃあ!」

「ミカがメイを羽交い絞めにしたまま、
マットの上へと引きずり込んだ。」



「や、やめ……て……くうッ！」
まだメイにはミカが敵にまわっていることが信じられなかった。だがミカのほうは平静な態度でメイを拘束し、自由を奪っている。

（ミカ……あなたが裏切るなんて……！）
「あく……うう、はあ、っ……！」

どれだけ力を込めて暴れても一緒だった。

2階級上の体重であるミカのロックは

強力な上にツボを心得ていて、メイにも崩せない。

「いい格好ね、メイ」

ユーリがメイの顔を覗き込み、再び胸に手を伸ばそうとする。

「こ……これ以上やったら許さないわよ！」

私が誰だか分かってるの？」

「あなたこそ知らないようね……この地下格闘技場のこと……」

仰向けさせられたメイの視界に、

天井のライトの強い光が差し込む。

「客はみなVIPのみ……ここで起きたことは決して口外しない。

ここで起きたことはどんなことでもすべて無かったことになるの」

子どもに諭すような口調で話すユーリ。

そこには初めての洗礼を受けるメイへの

憐れみと優越感が潜んでいた。

「言っておくけどバックに着いている組織……」

あなたのお父様の財閥よりも上だからね」



我慢することはないわ
フフフ...

皆が見てる前で
感じて
しまいなさい

ユーリはメイの胸のビキニをずらした。
「ッ！」

「最高よメイ……この形、この肌の色、質感、そして淡い色の乳首。こんなに綺麗な胸は見たことないわ」

ユーリは手で片方の胸をもみつつ、もう片方の胸と乳首を口に含む。

「あ——はあ、やあ！」

ウオオオオオオ——！！

観客がヒートアップし、大歓声をあげた。

（こんな大勢が見てる前で……！！）

メイにとって初めての屈辱。

怒りと悔しさと目の前が真っ赤になる。

「ソフフ……ちゅぶ、ちゅぶ……」

メイの表情を見ながらユーリはわざと音をたてて乳首をすすった。

「はあ……あ、く、うう！」

再びメイが暴れた。

しかしミカのロックは決してはずれない。

「く……ううん！ ん、はあ、ああ……！！」

こんな場所で半裸にされ、屈強な同性に胸を吸われている——。

どう考えても異常な状況だった。

（ありえない……こんなの……！！）

「はあ、はあ、……う、あ、はあッ！」

ユーリに胸を吸われるうちに異常に呼吸が乱れ、

何も考えられなくなっていく。

頭のなかは恥ずかしさと悔しさでいっぱいだった。

（でも……でもまだ負けたわけじゃない……！！）

こんな屈辱的なことをさせられているとはいえ、

体力も気力もまだまだある。

ミカのロックを抜け出すことさえできれば

逆転は可能なはずだった。

「くあ……はあ、や、う……！！」

「我慢することはないわ。」

フフフ、皆が見てる前で感じてしまいなさい！

「誰が……そんな……はあ、ああッ！」

ユーリの愛撫は執拗だった。

舌をねちっこく絡め、

メイの乳首が勃起するように刺激を加え続ける——。



フフ…
お嬢様も案外
ノリノリじゃないですか

ひよつとして
インラン
だったんですか？

ち……ちが…
私は…
はあッ…ああ…！

大丈夫ですよ
お嬢様が本当に
インランじゃないなら
私たちの攻めなんて
無視できるはずですから

これから
お嬢様をみんな
イカせてあげます
たかさんの人の前で
いっぱいイクといいですよ

気持ちいいこと
たくさんして
あげますからね

ふ…
ふさげないで！

あぁッ！！

そうね…
フフフ

「あ……はあ、うあ、く……う……」
ユーリに乳首を吸われるうちに、メイは異常なほど感じ始めていた。
（おかしい……こんな場所で……見られてる、のに……！）
下腹の奥が熱くうずき、触られたところにぴりぴりと
微弱な電流が流れるみたいになる。
「メイさん、もしかして感じてるんですか？」
「……？」

突然もう一人の「敵」が目の前に現れる。それはユーリ側のセコンドだった。
「あ……やあ、み、みないで……う、はあ！」
メイはもう完全に冷静さを失っていた。
「お嬢様、可愛いですよ」
ミカがメイの横にまわり、舌で肩や耳を愛撫する。

「はあ、あ……あぁッ！」
もう羽交い絞めにはされていない。逃げることもできるはずだった。
だが、今のメイにはそこまで意識が回らない。

「いや……ああ、はあ、うう！」
左右から乳首を攻められ、おまけにユーリに股間をいじられる。
（どうして……こんなに身体が熱いの!?!）
メイは今までにない感覚に翻弄されていた。

「フフ、お嬢様も案外ノリノリじゃないですか？
ひよつとして、インランだったんですか？」
「ち……ちが、私は……はあ、ああ……！」
「これからお嬢様をみんなイカせてあげます。
たかさんの人の前でいっぱいイクといいですよ」
「なにを……！」

「気持ちいいことたくさんしてあげますからね」
「ふ、ふさげないで！」
「大丈夫ですよ。お嬢様が本当にインランじゃないなら、
私たちの攻めなんて無視できるはずですから」
「そうね、フフフ」
「……ッ」

ユーリとそのセコンド、そしてミカがお互いに目配せしあう。
「じゃあまず私から」
ユーリのセコンドがメイの首にスリーパーをキメる。



「く……う、うう！」

(息が……)

酸欠になるかならないか、

その瀬戸際という絶妙な加減で

セコンドはメイの首をキメている。

「はあ、……くっ、はあ、あ……あう……」

「オリンピック中継を見てた頃から

ファンだったんですよーメイさん」

軽い口調だが、やることには容赦がなかった。

「あんなカワイイのにあんなに強いなんてステキです」

完全にメイを動けないようにして、ゆっくりと責めていく。

股間に指を伸ばし、

メイの反応を見ながらそこを丁寧に擦り上げた。

「あ……や、う……く、うう！」

敏感な場所を触られ、変なふうに力が入る。

それで余計に息苦しくなってしまう、意識が白く遠のく。

だが気絶する直前に一瞬だけホールドがゆるみ、

同時に股間を触られている快感がどつと流れこんでくる。

「あ——か、はあ、はあ……！ あ、う、ふああ！」

「そんなオナナの口を押さえ込んで

イカせたりしたらどんなに楽しいかって

テレビの前で想像しながらオナニーしてました」

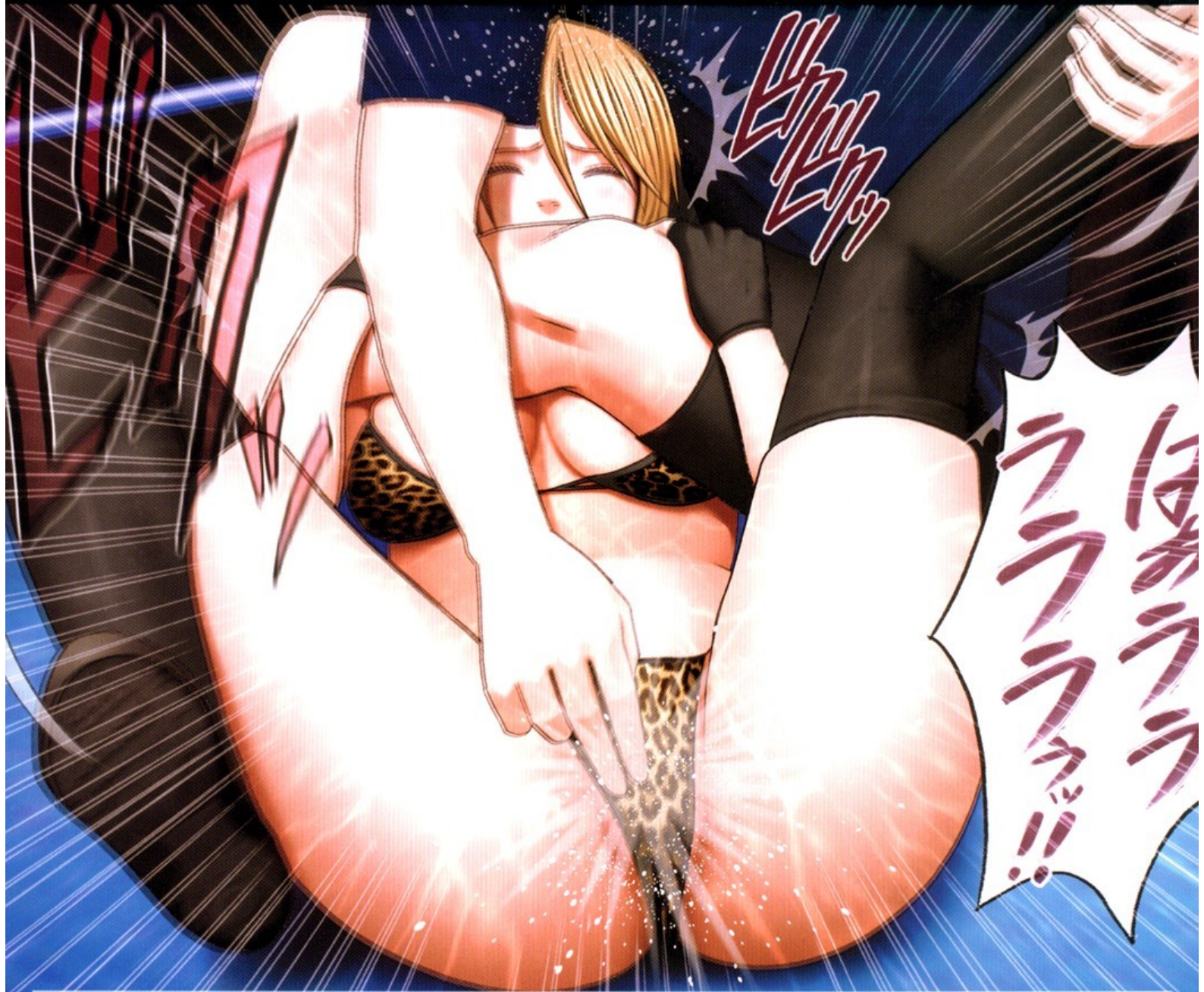
(ダメ……頭、おかしくなる……！)

普段なら、こんな技なら難なく返せただろう。

だが今のメイは完全に動揺している。

どうしようもなく胸を切なく締め付けてくる快感もまた、

メイの体幹を狂わせていた。



「いや、スポーツ中継をみながら性的興奮するなんて不謹慎だとは思ったんですけどね、

メイさんくらい美人な人が

マット上であんなに絡み合ったら

日な想像しちゃってもしょうがないですよね？」

「いや……あ、はあ、ああ……！」

脚をしたばたと振って暴れ、逃れようとする。

だがその動きはレスラーとしてのそれではなく、

完全にいじめられている子どものそれだった。

「はあ、あ……やあ、う……く、あ、く——」

セコンドはメイの状態を悟り、

また徐々に首の締め付けをきつくしていく。

「あ——か、は——」

そして同時に股間をいじる指の速度を早め、

執拗にクリトリスの周辺を攻めた。

「ん……く、んん——、く、あ——」

びくびくとメイの身体が震えた瞬間——。

また少したけホールドをゆるめ、メイに呼吸させる。

「はあ、すう、はあ——あ、ふあ！？ あ、あああああつ！？」

一瞬メイの脚のじたばたが止まり、身体がのけぞる。

ポルノビデオの女優がするように、快楽を感じながら

激しく息を吸うことで軽い絶頂に達してしまったのだ。

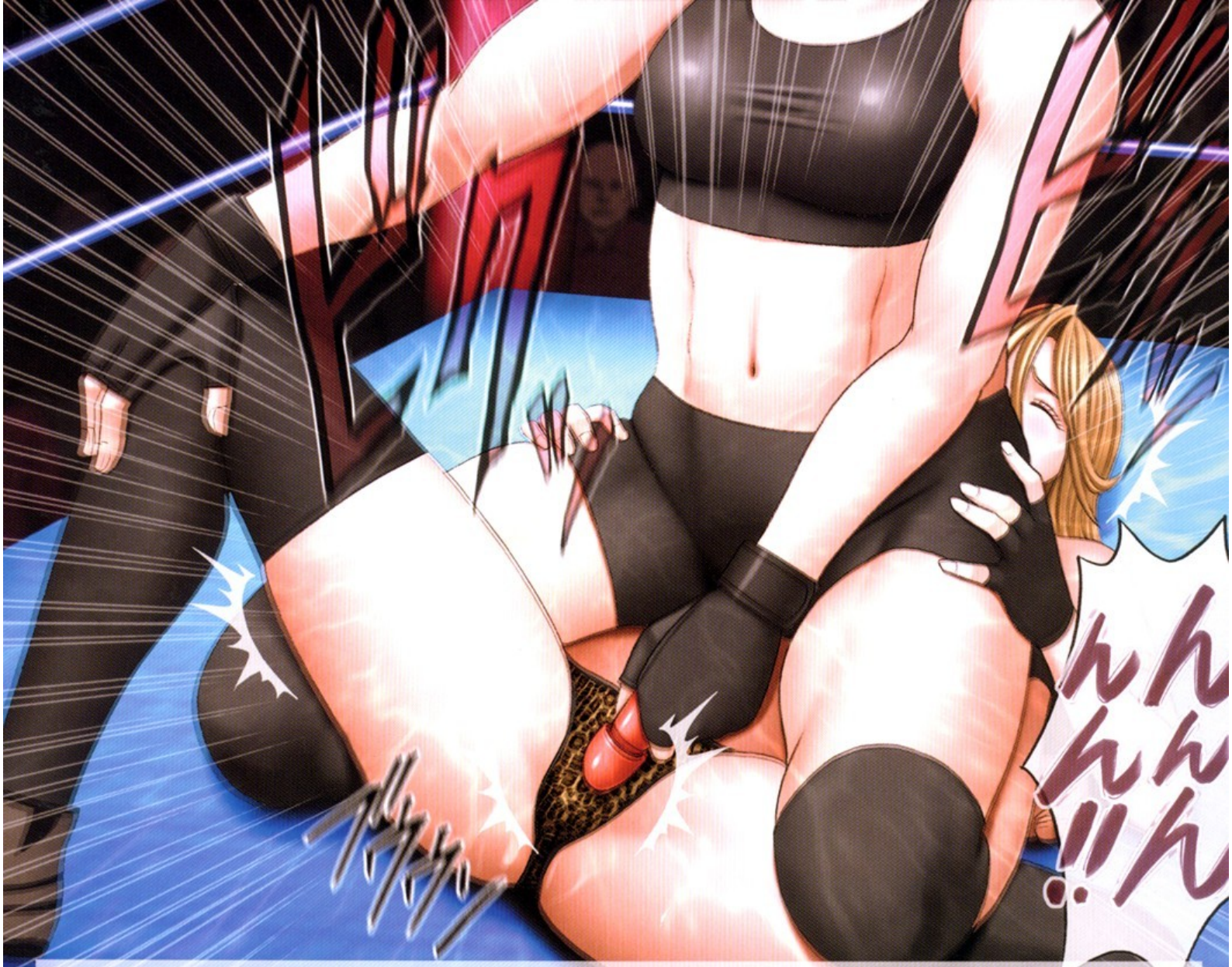
「はあ、あ——う、はあ、はあ……う、ふう、く……う……ッ」

(頭のなか、真っ白に……)

あああ
あああ
あああ
!!!

どっしって
声が出て
しまうの？

「次は私ね」
ユーリが合図すると、他の二人がメイの身体を持ち上げた。
観客にメイの幼児のような格好を晒して盛り上がりを煽りつつ、
自分は自陣のコーナーからパイプを持ち出す。
「これが何か知ってる？」
「……ッ」
ユーリはメイの目の前でパイプのスイッチを入れた。
独特の低音と共に、パイプが震え出す。
「そんなもの、持ち込んで……」
初めからこういうことをするつもりだったのね……」
「世間知らずのお嬢様に地下のルールを教えてあげるわ」
「ヴィイイイイ……」
パイプがメイの股間に押し当てられる。
「ッ!? あ、はあ、あああああッ!」
それはメイの予想よりもずつと激しい快感をもたらした。
「いや……あああ! くっ、う、はあ、あ……!」
「ずいぶん気に入ったみたいじゃない」
「やめ、ふあ、はあ、あう……んんう!」
不安定な姿勢のせいもあって、
どれだけ我慢しても声が漏れでってしまう。
「ヴィイイイイイ!」
「あ——はっ、う、いやああッ!」
パイプの振動を強くすると、それだけメイの嬌声も大きくなる。
「そんなにはしたくない大声を出すぞ観客席まで聞こえるわよ」
「う……く……はあ、あ……うう、あああッ!」
（どうして声が出てしまうの!?!）
ユーリに、そしてこんな機械に翻弄されてしまっている
自分が信じられなかった。
（ダメ……くじけちゃダメ……!）
いつだって最後に勝つのは私だった……今回だって、きつと!）
「フン。まだそんな顔ができるの?」
ユーリは皮肉げに笑い、メイを押し倒す。



「あなたの負けはもう確実よ。何をしたって無駄！」

「あ……はっ、ぐ、くうう！」

メイの細くくびれた美しい腰の上に、
太くたくましいユーリがのしかかる。

脚でふとももをおさえ、大きく股を開かせた。

「ぐ……く、う……ああ！」

しかし、ここでメイが初めて反撃に転じようとした。

強い意志の力で脚をはねあげ、ユーリの体重から逃れようとする――。

「無駄って言ったでしょう？」

ユーリはメイの反撃を格闘技で返そうとはしなかった。

単に、震えるパイプを股間に押し当てただけ。

「ふああ……！」

けれどそれだけメイの力は抜け、マットに沈んでしまう。

「ほらっ？どうだ？悔しいか？」

「一流選手にいいように弄ばれて……！」

「あ、はあ、ああ……ん、くうう！」

パイプさえなければメイの反撃は成功していたかもしれない。

だが現実はずう。

ヴヴヴヴヴ――！」

「うああ、はあ、んう、ふあああ！」

その振動だけで、あられもない声をあげて全身で感じてしまう。

「このままイッてしまいな！」

「う――いや、いやああ！」

再び暴れようとするメイだが、

ユーリがパイプの振動を強くするとすぐにおとなしくなった。

「ラフ……！」

体重をかけられ、脚を観客席のほうにむかって開かされたまま

じつくりとパイプで刺激される。

（いや……また、頭が真っ白に……ッ）

ユーリはソフトなタッチと強いタッチの両方を使い分けつつ、

メイのクリトリスを集中的に責めた。

「ああ……く、は――あ……！」

（もう、ダメ……！ また……！）

「あ、ふあ、――んんんううッ……！」

今度はさつきよりも大きな絶頂。

ユーリに組み敷かれながら達してしまった。



自分から危険に
飛び込んで
『もつと刺激が欲しい』
だなんて…

ふざけるのも
いい加減に
してください

メイお嬢様は
負けたことが
ないから
そんなバカな発想を
しちゃうんですね

世の中そんなに
あまいもんじゃ
ないですよ

今日は徹底的に
負ける屈辱を
味わって
もらいましょうか

ぐっ
ぐっ

最後は召使いのミカだった。

ぐったりと疲れきっているメイを組み伏せ、直接股間に手を伸ばす。

「ひ……………」

「お嬢様、すごく濡れてますよ」

「……………」

ミカは無遠慮に指を動かし、メイの秘所を蹂躪する。

乱暴な動きだが、そんな動きを受けいれてしまうくらいに

メイのそこは濡れそぼっていた。

ミカは愛液でてらてらに光った指をメイに見せつける。

「世の中そんなにあまいもんじゃないですよ」

今日は徹底的に負ける屈辱を味わってもらいましょうか」

「いや……………ああ、う、はあ、ミカ……………」

あなたのことは、私、信じて……………く、ふあああ！」

「完ぺきなお嬢様を相手に、

私がいつもどんな気持ちで接していたかわかりますか？」

「ミカ……………はあ、あ……………」

「私は……………お嬢様を見るたびに、“負け”を感じてたんですよ。

こんな私とは似ても似つかない、何もかも思うがままの——」

でも今日は、とミカは笑みを浮かべる。

そしてそのまま無言になって、ひたすらにメイの秘所を刺激した。

先ほどの二人のようにクリトリスをいじることはせず、

膣口に指を挿入して慣らしていく。

「あ……………はあ、くう、ううう……………ん、ひああ！」

普通なら反応しにくいはずの激しく身勝手な愛撫。

けれど、今まで二度も達してほぐれたメイのそこは、

貪欲に快楽を見出した。

「やめ……………は、あ、だめ……………」

ミカ、こんなこと、もう、やめ……………あ、はあ、ふあああ！」

「ああ……………お嬢様、最高です。もつと感じてください。

お嬢様でも快楽には勝てないんですよ……………」

「あ、く……………うあ、はあ、あああああっ！」

激しく膣口を刺激され、またメイは達してしまっていた。

本当はすごく
感じてるでしょう？

こんな風に
組み敷かれて
たかさんの人に
見られて……

私みたいな
格下に
いいようにされて

あッ!!

あッ!!

はッ!!

あ

あ

「はあ、はあ……あ……う……」
三人に組み敷かれ、身体のあちこちを触られる。
強いスポットライトを浴びせられ、
観客に恥ずかしい姿を見られている——。
(ダメ……頭おかしく、なる……っ)
メイの感覚は完全に狂っていた。
ユーリやミカの指先が触れると
それだけで達してしまいそうになるのだ。
「あ……もう、やめ……てえ、はあ、んんう！」
愛撫はけして激しいものではない。
だが、そうやって悶えている自分が衆目に晒されていること——
それが屈辱を煽る。
本来イヤで仕方がないことのはずなのに、
どうしようもなく高ぶってしまう。
(身体が……熱い……！)
「お嬢様 本当はこういう展開を望んでいたんじゃないですか？」
「え……？」
「刺激が欲しいというのは、
実はこういうことだったんじゃないですか？聞いてるんです」
「な、何を言ってるの!？ 私はこんなの、望んでな——」
「本当にそうでしょうか？」
ミカは笑って言いながらメイの脇腹をさする。
「う……はあ、ああッ！」
「本当はすごく感じてるでしょう？」
こんな風に組み敷かれて、たかさんの人に見られて……
私みたいな格下にいいようにされて」
「あ、はあ、ん……うう！」
違う、そんなはずはない。
そう反論したくても、メイの身体の反応は正直だった。
「イヤなら抵抗すればいいんですよ。」
ほら、お嬢様なら簡単なことでしょう？」
「はっ、あ、うあ、ん……うう、くっ、あ……！」
(どうして身体が動かないの……!?)
ただ悶えるだけで自由にならないメイの四肢。
力をこめても震えるだけで、立ち上がることもすらできそうにない。
「うふふ……さあ、お嬢様を皆に見てもらいましょう」



一流選手や
召使いの玩具に
されてるなんて……!

こ…
こんな屈辱……!

!!

ミカが合図すると、ユーリとセコンドが
メイの四肢を大の字にさせた。
「やばいですね、メイお嬢様。
一番恥ずかしいところを、
こんな大勢の前でさらすことになりますよ」
メイが動けないのをいいことに、ミカは下着に手をかける。
「や…やめろ!」
強がって言っても無駄だった。
ミカは陶酔するような笑みを浮かべたまま、
一気にメイの下着を引きちぎった。
「いや……あ、いやあああつ!」
「アハハハ! いい鳴き声ですよ、お嬢様!」
「く……うう……ッ」
メイは唇を噛んで声を押し殺す。
「こんな……屈辱……」
裸に剥かれ、改めて自分が「召使い」や「2流選手」の
玩具にされてしまっていることを自覚する。
「あう……く、う、はあ……っ!」
「おっと、すごい力だな。
この力をさつき出すことができたら良かったのにな」
羞恥が限界をこえ、いくぶんかメイ本来の力が戻ってくる。
だがもう既に遅かった。
今更暴れようとしても三人がかりで完全に抑えこまれてしまい、
ただいたずらに体力を消耗していくだけだ。
「どうですか、お嬢様。
自らの全てをこんな大勢の前でさらした気分は」
「く……!」
「へえ、まだそんな反抗的な目ができるんですか。
見上げた根性ですね」
「こんなことくらいで、私は……ッ」
「やれやれ、まだ生意気なことをいうんですか?
少々お仕置きが必要みたいです」

いままで
メイお嬢様の
わがままに
ガマンして
きましたけど

今日は
全部吐き出させて
もらいますね

ああ!!

パシッパシッ
パシッパシッ
パシッパシッ

あ

あ

ああッ!!

「な、なにを……」

「なにつて、お仕置きですよ。」

お嬢様が幼い頃に旦那様からされていたみたいに……」

「こんな間近でメイさんの顔を見れるなんて、幸せものです」

セコンドが相変わらずの軽い口調でいいつつ、

メイの身体をしつかりと抱き込む。

「は、放して！ だ…ダメッ——」

——パシン！

「!？」

メイの下半身に突然訪れた衝撃。

「お嬢様。これ以上わがままを言っってはいけませんよ」

「え——ミカ、あなた何を」

「勝手に口をきかないでください」

——パシン！

「ほう!」

また下半身に衝撃が訪れる。

「ウフフ……メイお嬢様に、お仕置き……この私が！」

ミカが興奮して目を血走らせつつ、

またメイのお尻を思い切り叩いた。

「んう!!」

小気味の良い乾いた音が鳴る。

「いつもいつも！ 私をバカにして！ 蔑んで！」

パシン！ パシン！

「ち、ちがう！ ミカ、私はそんな——ああ、ふああ！」

「今更言い訳したって無駄ですよ。」

一番近くでお嬢様を見てきた私だからわかるんです。

あなたという人は、いつだって——」

パン！ パシン！

「う、くう、あああつ！」

パシン——!!

「おや?」

「……?」

ミカが大袈裟な声をあげる。

「おかしいですね……お嬢様、濡れてきているじゃないですか」

「え……?」

「こんな風にお尻を叩かれて、もしかして感じてたんですか?」

お嬢様……
私は失望しましたよ……
これじゃあお仕置きに
ならないじゃないですか

お嬢様がまさか
お尻を叩かれて感じる
ヘンタイ女だったなんて

叩ッ

あッ

丸ッ

叩ッ
あッ

クチュ、チュ、クチュ……。

「……！」

ミカの指が触れるとメイの秘所ははしたなく水音を立てた。
「まるつきりインランの、マソじゃないですか！」

パシン！

「ひああ！」

メイが思い切り左手を振り下ろす。

けれど右手はあくまで優しく、執拗にメイの秘所をいじる。

「ふあ……はあ、あ……ん、う、くう！」

パシン！ パン、パシン！

「いやあ！ はあ、う、あ……！」

ミカは叩きつつも愛撫の手もゆるめない。

右手と左手をバランスよく操りながら確実にメイの性感を高めていく。

「フフフ……お嬢様、我慢しないでいいんですよ。」

そろそろ観客の皆さんにも、

お嬢様が叩かれて感じるヘンタイだってことが

分かっているはずですから」

「ちがう……私、は……はあ、ううう、んうう！」

どれだけ言い逃れをしようともう一緒だった。

叩かれて赤く腫れているお尻と、

とろとろの愛液を垂れ流している陰唇。

その両方を晒してしまっている。

「このまままたイカせてあげますからね……！」

ミカは慈愛すら含んだ口調で言って、手の動きを早めた。

「ひ……！！ はっ、あ、あ、あ……！！」

パシン、と相変わらず小気味の良い音が鳴り、尻を叩かれる。

けれどそれと同時に指でなかをかきまわされるのが

どうしようもなく気持ちよかった。

「あう、ん、はあ、い……あ、あああつ、あああああ！」

痛いのか気持ちいいのか、あるいはその両方か。

メイの性感は異常なスピードで高まる。

「あ……や、あ、だ、めえ……！」

パシーン！

「あ、はあ、あ——あああああああつつ！！」

（何、これ……何なの、この感覚……！！）

痛覚と快楽の狭間で、メイはまたしても絶頂に達してしまう——。



「才能も環境もすべてがめぐまれたお嬢様にとって人生最大の屈辱の日にしてあげるわ」
ミカは追撃の手をゆるめない。
レフェリーの中年男に合図し、下半身を露出させた。
「今からこの男のものがお嬢様のなかに入りますからね。嬉しいでしょう？」
「え——？」
「美しいお嬢様のみすぼらしい中年男に犯される……最高のショーでしょう？」
「や、やめ……いや、いやああ！」



レフェリーの男はやや面倒くさそうな表情を浮かべつつ、メイの股間にペニスをあてがった。
「いやああ！」
「大人しくしてください、お嬢様。きっと気に入りますから」
「あ、はあ、あ……う……んううう！！」
ユーリとセコンドががちりと押さえつけたところで、レフェリーは剛直を一気にメイの腔内に挿入した。



「は——あ、う、痛つ……う、く——」
「あはははは！ イイ格好ですよ、お嬢様！」
ミカは狂ったように笑いながらメイの顔を首筋をなめまわした。
「ああ、最高です……お嬢様がこんな男に犯されてるなんて！」
「ひゃああ、ああ、は……いやあ！」
抜い、て……はあ、く、うう……！」
レフェリーの男はひゆうひゆうと醜く息を吐きながら、
だらしない表情でメイのなかを往復する。
観客の盛り上がりは最高潮に達し、
メイに卑猥な怒号を次々と浴びせた。
「あうう、ん、はあ、あ……おわき、い……！」
鍛えているメイのなかの感触は男にとって極上のものだった。
しかも十分濡れていて、全く気を使う必要がない。
男は自分の好きなように動いて快楽をむさぼる。
「ククク……傑作だな。」
金メダリストが中年男に犯されてるなんてなあ？
「セコンドとユーリが目配せしあい、メイを嘲笑する。」
「う……くう、はあ、あ、あなた達なんて……！」
「ん？ 私達がどうかしたか？」
尻を叩かれて感じるヘンタイ女のメイさん？
「い……ううう、はあ、あ、あう……んん！」
もうメイのプライドはずたずただった。
敗北を喫しただけでなく、様々な痴態を晒してしまった。
動揺していたとはいえ大勢に見られている前で
身体を弄られて達してしまい、パイプにもだえ、
尻を叩かれて濡らしたのだ。
「う……ゆ、ゆるさない……こんな……！」
「ほう？ 何をどう許さないんだ？」
「うぐ……くう、はあ、ああう、んう……！」
中年男に犯され、満足に言葉を発することもできなかった。

次は…
負けないッ！

あああ
あああ
あああ
!!!

パチュ、グチュ、ジユブ——！

メイが犯されて感じまくっていることはどこから見ても明白だった。男に身体をゆすられ、奥を突かれ、目を潤ませている。

頬も全身もうっすらと桜色に染まっているその姿は、経験がある者なら誰でも“本気で感じている女”だとわかった。

(いけない……また頭のなかが、真っ白に……！)
さつきユーリやミカにやられた、

快楽を与えるための刺激とはまた違う。

男が自分の快楽を追及するだけの動きで

メイは気持ちよくなってしまうていた。

「はあ、あ、はっ、あう……ん、ふあああ、だめえ！」

観客の目に晒されながらメイは確実に高みへと登りつめていく——。
(どうして……こんなに気持ちいいの!?)

身体の奥からあふれた熱が胸を締め付け、
全身に広がっていくこの感じ。

令嬢として財力と才能に守られ生きていたメイは、

心のどこかでそんな自分の殻を破ってくれるものを探していたのだ。

「あ……はあ、ああああああ、や、うう……！」

(きもち、いい……！)

初めて味わう裸の戦いに心のどこかで酔いしれる。

メイは気づく。

犯される屈辱を味わうことで古い自分を捨てられたことに。

「ふああ、あ、や……イ……き、そ、また……はあ、あ……！」

メイは自分から男の動きに腰を合わせ、最後の感覚を待ち望んだ。

「お……おおっ！」

男がフザマな声をあげ、最後のひとつきをメイの膣奥に押し付ける。

「ああ、は、う——あああああつつつ——！」

男に奥の奥まで犯されるこの感覚は

メイにとって忘れられないものになる。

この先、復讐と反撃が成功しても失敗しても、

この熱さと汚される感覚を思い出さずにはいられないのだから……。

ケーシャ編



某国の女スパイ・ケーシャは政府の要請を受け、
非合法組織に潜入調査をしていた。
簡単な案件ではなく、捜査はかなり長期間に渡った。
スパイとしてのベテランの経験と
天才的な才覚を持つケーシャでも、
いよいよ体力気力共に限界が見えてきた頃。
(このデータは……！)
ケーシャは小型端末の前で息を呑んだ。

組織の幹部しか入れない、
何重にもセキュリティのかかっている部屋に通いつめた結果、
ついに決定的な証拠をつかんだのだ。
このデータさえあれば連邦政府も重い腰をあげることだろう。
最新の注意を払ってデータをコピーし、
組織の施設から抜け出す準備をしていたが――。





「……………」
部屋の扉が開き、組織の幹部が入室してきた。
(なぜ…………この時間に…………!)
ケーシヤの事前リサーチでは、
今は海外に出かけているはずだった。
「フフフ…どうやらネスミが迷い込んでいたか。
お前はどこのネスミだ？」
「……………」
ケーシヤは黙って幹部の男を睨みつけつつ、
コピーしかけのデータを持ち帰る方法を考える。
もちろん男の問いに応える気は全くなかった。



「そう簡単に口は割らないか…仕方ないな」
幹部の男が合図をすると、取り巻きの手下たちが現れる。
「おい…………この女を生け捕りにしろ…………」
傷はつけるなよ…………ククク」
数人の男が一齐にケーシヤに襲いかかる！



「はっ！ やあッ！」

鋭い掛け声と共にケーシャの回し蹴りが炸裂する。

「う……………」

これで最後だった。

ケーシャと幹部の男の間には、手下の男達がのびて泡を吹いている。軍隊で厳しい格闘訓練を受けてきたケーシャだ。

辺境国の組織の三下などまったく相手にならない。

「ふむ」

幹部の男は面白くなさげにひとつ息をつき、

倒れている手下たちを見下ろす。

幹部の男が新たな手勢を呼ぶ気配はなかった。

完全にケーシャと一対一になる。

（ここまでできたらついでにこの幹部の男を捕まえて

更なる情報を聞き出すか）

ピンチの後にチャンスが来る——

それがケーシャが軍の教官から教わったことのひとつだ。

このチャンスをみすみす逃してしまう気はない。

あくまで貪欲に“結果”を求める。

「ほほう……………なかなかの腕前……………。それにその美貌……………」

私の部下に欲しいくらいだよ。」

「……………」

ケーシャは無言で構えをとった。

「仕方ないな…私が直々にやるしかなさそうだな。」

幹部は静かに言うとう上着を脱ぎ、筋骨隆々とした己の肉体を誇示する。

（フン…………）

そこそこは鍛えているのだろう。タフネスはありそうだった。

だが、スピードでは絶対に負けない。

ケーシャに言わせれば、幹部の男の肉体など

見せかけの強さで飾ったデク人形に過ぎなかった。



「ハアツ！」
気合一闪、ケーシヤの蹴りがいきなり男の顔面に飛ぶ。
重い音と共に男が二、三歩後ずさった。
その隙を逃さずにどんだん連撃を加えていく。
「オオ……！ く、ぐ……」

男は基本は受けにまわり、ケーシヤの攻撃を腕や脚の筋肉で防ぐ。
（この男……できるな……かなりタフね……）
ケーシヤのほうも次第に息が上がってくる。
連日の捜査による疲れもあって、普段より疲労の度合いが濃い。

（だけど……この勝負は私の勝ち……！）

とはいえまだまだ余裕はあるし、男のタフネスも想像の範疇だった。

しばらく時間はかかるだろうが、

きっとガードをこじあけることができるはずだ。

時々男の反撃もあるが、

（パワーだけでスピードはまるでない……）

ケーシヤにとつてはくみしやすい相手だった。

このままダメージを蓄積していけば、

きっと致命打を加えることができるはず——。

「……？」

だが——急に足元がふらつく。

「う……」

異変を感じ、ケーシヤは男から飛びずさった。

（な、なに……！？）

頭にぼんやりともやががかり、全身が徐々に弛緩してくる。

「う……か、はあ……ッ」

呼吸を整えて力を入れ直そうとしても、息をはくたびに膝ががくと震えた。

「フフフ……どうやら効いてきたようだな」

「……」

「さつき部下達と戦っていたとき 何度か刺すような痛みは感じなかったか？」

（……まさか……！）

「部下の指輪にはあらかじめ毒針を仕込ませてある。効きはそんなに早くないが、完全に回ればゾウでも動けなくなる特注の麻痺毒だ」

「く……はあ、う……」

「あまり無理はしないほうがいいぞ。あれだけ元気よくはねまわっていたんだ……もう相当に毒が回っているはずだからな」

男は笑い、固めていたガードを解いた。

ククク…
さあ、その身体で
いつまで戦えるかな？



これ以上は戦えない…!!
ここは逃げることに
徹するしか…!!

「あ……はあ、う……ん、はあ……」
みるみるうちに身体中の力が抜ける。
そのくせ感覚は鋭敏になり、頭の芯がぼうつと熱い。
「ククク……。さあ、その身体でいつまで戦えるかな？」
「く……うう！」

無防備に男が近づいてくるのを見て、
ケーシヤはなんとか一撃を加えようとする。

「はあ、う……んあ……」

だが膝のバネを使って跳躍しようとしても、
そのまま崩れ落ちてしまいそうになるだけだ。

「う……はあ、あ……!!」

おまけに動くたびにタイトなボディースーツと肌がこすれ、
くすぐったいようなもどかしいような感覚が訪れる。

「ん……!!」

胸や股間は特に摩擦を強く感じた。

まともに立ってられないほど、

ピリピリとした痺れが敏感な場所を包む。

(まずい……! これは……!)

「ずいぶん汗をかいているようだな」

「……ッ」

男の言う通り、ケーシヤの全身にうっすらと汗が浮かんでいる。
戦っているときは体温の上昇などほとんど感じなかったのに、
麻痺毒の効果は強力だった。

「う……く……ッ」

スパイとして、ある程度は薬理の知識もあるし
耐性の訓練もしてきた。

だが、この麻痺毒は身体の解毒力を大きく上回っている。

(これ以上は戦えない……!ここは逃げることに徹するしか……!)

ケーシヤは反撃を諦め、逃走経路を探す。
だが――。

めったにないほどの
上玉だ

スパイにしておくには
もったいない……
簡単には逃がさんよ

「ああッ！」

男はケーシャの意図を理解し、バックへとまわった。

「く……はあ、うう……！」

対応しようにも、身体の動きはもう既に鈍くなりすぎている。

男に簡単に背後をとられ、動きを封じられてしまう。

「めったにないほどの上玉だ。スパイにしておくにはもったいない。

簡単には逃がさんよ」

男は背後からケーシャに抱きついた。

「あ……」

筋骨隆々の腕を腰と胸にまわされる。

ケーシャはなすすべもなく立ち尽くし、男にされるがままだった。

（ここは大人しくして……隙を探るしか……）

男の身体が、体温が密着する不快な感覚。

しかし今は耐えるべきときだった。

「う……あ、く……」

「どうした？ もうおしまいか？」

「……ッ」

男の挑発には乗らず、なるべく身体を動かさないようにする。

毒が急激に回りきらないようにあくまで心臓を落着け、深呼吸をした。

「……」

けれど、ケーシャが大人しくなったのをいいことに、

男は胸の先端にまで指をまわしてくる。

「うあ……はあ、あああ……！」

感覚は急速に鋭敏になって跳ね上がり、

ケーシャは声をあげてしまう。

（これも……毒の効果……！）

スーッとこすれるだけで快感を得てしまったそこは、

男にいじられることで更に高ぶる。

「く……うう、ん……ふあ、はあ……んう！」

ケーシャは身体の震えを止めることができなかつた。

男に少し触られただけで一瞬で火がついてしまったのだ。

（これは……まずい！）

静かに耐えている場合ではなかつた。

触られると胸が切なくなり、どくどくと心臓が早鐘を打つ。

（いけない……このままだと……）

ここからは
私の時間だな…
さあ答えてもらおうか

お前は何者だ？
どこの差し金だ？

ケーシヤは反撃に転じる。

「や……はあ、くう……うう！」

だが既に身体には毒が回りきっているうえに、男に完全に有利なポジションをとられてしまっている。

「うあ……はあ、あ……！」

理性を総動員して男のほうへ拳を突き出す。

だがそれはどうしようもないほど緩慢な動きで、格闘技の素人でも容易に避けられるものだった。

「ククク……」

男は難なく身をかまし、再びケーシヤのバックをとる。

「はあ……あ、やあ……くうう！」

（なんとかして……逃げて……ッ）

ケーシヤは必死に暴れ、男の手から逃れようとする。

だが、既にその動きは女スパイとしてのものではなく、ごく普通の女子どものものだった。

（毒が……完全に……）

自分の頭のなかでは精一杯反撃しているつもりでも、実際は何もできていない。

「ここからは私の時間だな……さあ答えてもらおうか。

お前は何者だ？ どこの差し金だ？」

「ぐ……う……」

（それだけは絶対に隠し通さなければ……）

ケーシヤは固く口をつぐんだ。

「強情になっても何も良いことはないぞ」

言って、男がケーシヤの乳首を軽くひねる。

「ッ……」

しかしそれでもケーシヤは声をあげなかった。

（耐え切ってみせる……！）

「ほう？」

「……ッ！」

男の指が執拗に乳首を刺激してくる。

それでも歯を食いしばって耐えた。



「フン……少しはやるようだな」
男は少し鼻白んで言った。

「だが、まだまだこれからだ」

すぐに機嫌をとりなおし、ケーシヤの身体を抱え上げる。

「!?」

野太い指に力強く腰をつかまれ、身体の高さがぐんぐん上がる。

(な、なにを……!)

男はケーシヤの脚の付け根をがっしりとつかみ、

自らの眼前へ股間を持ち上げた。

「!?」

そのまま自らの顔とケーシヤの股間を密着させる。

「う……」

不安定な姿勢。

男の挙動にあわせてぐらぐらと全身が揺れるのは

何ともいえない不安感がある。

(こんな姿勢から落とされたら……)

身体がほとんど麻痺している今、受け身をとることも難しいだろう。

下手に暴れるわけにもいかず、

ケーシヤは無意識に男にしがみついでしまう。

「いい香りだ」

「……ッ!」

ケーシヤが動けないのをいいことに、男は無遠慮に舌を伸ばした。

(生暖かい……)

今まで感じたことのない、独特の感触が股間にあらわれる。

ぶあつい舌が敏感なそこをぞろりと舐め上げ、粘っこい感触を残した。

(う……)

男の舌の動きを意識した瞬間に、

ぼっと下原の奥に火がついたようになる。

(な……なに、この感じは……)

まだ声はあげていないし、我慢することも不可能ではない。

けれど格段に追い詰められている感覚がある。

不安定な姿勢がいつしかケーシヤの精神を追い詰め、

少しずつ心を蝕んでいる。

(うう……気持ち悪い……)

下から上へと男の舌が這い回る。

男の唾液がべったりとついたせいか、ボディースーツは不快に湿っていた。



「く……う……はあ、はあ……」
我慢しているのに徐々に声が漏れ出す。
息が荒くなり、身体が高ぶっているのがわかった。
(こんな……どうして……)

心臓が再びどくどくと早鐘を打ち始め、
毒が質の悪いアルコールのように
ぐるぐると全身をまわりだす。

(そうか……毒のせいで、敏感に……ッ)

力が入らないくせに感覚だけはどこまでも鋭敏になり、
舌で魂ごと舐め上げられているみたいに――。

「あ……はあ、あ……う、ふあ、あああ！」

いつしか男の舌がびちゃびちゃと水音を立て始める。

「なかなかの味と香りだ」

「……!!」

男のくぐもった声が響く。

(まさか……私、濡れて……)

否定したい。

そんなわけないと思いたい。

けれど、自分の身体が高ぶっていることは明らかだった。

「や……あ、いやあ、ああ……!!」

こんな男に自分の香りがかがれることは屈辱だった。

それなのに徐々に身体は熱くなっていく。

(舌が……いやだ、感じたくないのに……!!)

男は舌の先端を尖らせ、ボディースーツの生地の上から
ケーシヤの敏感なところをノックした。

「はあ、ああう、ううん!!」

舌にケーシヤのクリトリスのとっかかりを感じ、
男はひそかに笑う。

「や……あ、いやあ、はあ、うう……!! ん、あ、んん!?!」

すほめられた舌の先端が

連続でケーシヤのクリトリスをつついた。

「あ、だ、め……!! はあ、あ……ア、はあ、ッ……!!」

びくびくとケーシヤの全身が震える。

切なく胸が締め付けられる感覚。頭の中に散る純白の光。

「あ、はあ――あああああッ!!」

イキながらケーシヤは男にしがみついた。

フフフ…
情けないな…
敵組織の幹部に
股間を責められて
絶頂に達して…

さあ…
そろそろ口を割る気
になったかな？

ん
ッ！

…!!

「く……はあ、はあ、はあ……」
やつと床に下ろされ、ケーシャはほっとしたように息をつく。
「さあ……そろそろ口を割る気になったかな？」
「……………」

だがまだ諦めたわけではない。息を整えながら男を睨む。
それが今のケーシャにできる精一杯の抵抗であると同時に、
彼女のプライドを保つための方法だった。

「なかなか訓練されたスパイだ……ならばこれでどうかな？」
そんな反応を見ても男はうろたえずにむしろ楽しそうに笑う。

そして、脱ぎ捨てた衣服のなかから小さなカプセルを何粒も取り出した。
「な……？」
ケーシャが動けないのをいいことに、そのカプセルを股間に押し付ける。
「プレセントだ」

「え——や、やめろ！ いったい何を！？」
男はケーシャのスーツの股間部分の生地をずらし、陰部を露出させる。

そして手にもった小さなカプセルを
濡れそぼった膣内へとぐいぐいと押し込んだ。

「っ……………」
一粒一粒は小さなカプセルを、器用に指を使ってどんどん膣内へ——。

「あ、く……………」
動けないケーシャの目の前で、そのおぞましい行為を続ける。

「ま……待て！ な……何を入れた！」
たつぷり数十秒かけて男は大量のカプセルをケーシャの膣内へと挿入し、

またスーツの生地で蓋をした。
「おっと、あまり大声をだしたり暴れたりすると
おまえのなかでカプセルが割れちゃうぞ？」

「……………」
「このカプセル一個でも摂取すれば、女はたちまちイキ狂う。

基本はさっきの毒針と同じ媚薬だ」
さしものケーシャも青くなる。

戦闘の最中に、その薬を塗った毒針に刺されただけで
今の自分のこの状態なのだ。

それをあんなカプセルで大量に注ぎこまれたら——。

「おわかりのようだな。もしなかでカプセルが何個も割れたら……
きつと今の自分ではいられなくなる」

ダメだ…
カプセルが…!

ククク……そうだ
そら……もつと
尻を高くあげろ

苦しそうだな
あまり我慢しすぎるのも
良くないぞ

明らかかな脅し。だが、男に従うほかない。

「う……はあ、あ……」

ケーシヤは男の言う通りにそろそろと姿勢をかえ、尻を突き出すような格好をする。

「こつちも可愛がつてやろう」

「え——」

男が指を伸ばしたのは後ろだった。

「そ、そんな、そっちは！」

「大声を出していいのかな？」

「く……ッ」

「ククク……そうだ。そら、もつと尻を高くあげろ」

言って、男は本格的にアナルへの愛撫を開始した。

上品にすぼまっているそのシワを指でゆつくりとなぞり、

徐々にほぐしていく。

「あ……はあ、くう、ん……」

（こんな男に……私は……!）

単にクリトリスや陰唇をいじられるよりも

もつと大きな屈辱と憤りがケーシヤのなかに渦巻く。

「や……う、く、あ……」

（ダメだ……カプセルが……!）

男が生地ごしに強く指を押しこむ。

すると十分にほぐされたそこは、わずかではあるが太い指をくわえこんだ。

「——!」

パキ、パキ——。

「あ、ああ、あ……」

腔内でカプセルがいくつか割れたのがわかった。

「ああ……う、ふあ、ああ……」

とろりとした内容液が流れだすと同時に全身ががくがくと震えた。

（な……なに、コレ……!）

「ククク……」

男もそれを察して笑い、ケーシヤの耳許に口を近づけた。

「これ以上カプセルから媚薬がカラダに流れ込むと

二度と元に戻れないくらい淫乱なカラダに改造されてしまうぞ？」

「そ……んな……く、はあ、はあ、はあ……うう……」

息もできないほどの高揚感。

（くっ……! まずい! 頭が真っ白になってきた! これ以上は……ダメだ!）

身体が着実に媚薬に支配されていく。

ククク……どうだ？
自らインラン女に
堕ちていく気分は？

カッ
カッ

なんとか……
我慢して……
これ以上は……

でも我慢なんて……
どうやって……！

びくびくと全身が震えるのを止めることはできない。
「さあ、カプセルを割って自分で自分を使い物にならなくするといい」
男がケーシヤの首をおさえ、軽いタッチで股間を攻めた。
「あ、はあ、や……う、んふああ！」
上半身は抑えられているが、下半身は自由に動く。
男の責めに反応してもだえ、腰が動いてしまう。
「く……うう、ん、はあ、あ——」
股間を刺激されて跳ね上がった腰が、勢いよく床に打ち付けられた。
パキ——。

「……………ッ！」

そのシヨックでまたひとつカプセルが割れた。
とろりとした液体が腔内の粘膜に触れると同時に、

「あ、ふあああああ、ああっ！」
また訪れる絶頂。

「ククク……どうだ？ 自らインラン女に堕ちていく気分は？」
「く……うう、はあ、ふあ、あう……ん、くうう！」

反論しようとしてもできない。
男がフェザータッチで秘所をさわるだけで反応してしまう。

「おっと、こつちも好きなんだったな」
前だけでなく、再び後ろの穴も刺激してくる。

「ひゃ……！ん、ううううううう！！」
突然訪れた感触でまた軽い絶頂に達し——。

パキパキ、パキ——。

（そんな……！）

カプセルが割れていく。
いくつかのカプセルが割れて液状化していることを考えれば、
腔内の圧迫はいくらか緩くなるはずだった。

けれど、カプセルが割れるペースはむしろ早くなっている。
達するたびにケーシヤの腔内の締め付けもより強くなり、
カプセルが少なくなっても腔圧で割れてしまうのだ。

「さあ言え…… お前はどこの差し金だ？」
男の声が頭にわんわんと響く。

それすらも快感に受け取ってしまうのが今のケーシヤの身体。
だが——。

「ぜ……絶対に言わない……！何も……！」

それでもまだケーシヤの精神は屈しなかった。

絶対に
屈しない……ッ！

カプセル
カプセル

「なかなか強情だな」

男は楽しげに目を細め、睨みつけてくるケーシヤを見下ろす。

「……ッ」

「その意志の力に敬意を表して、じきじきに触ってやろう」

今まではケーシヤのスーツの上から触っているだけだったが、今度は指先を器用に使って素肌を露出させた。

「う……」

「十分濡れているな」

男が指を二、三度往復させただけで

粘液が大量に付着してらと光る。

「あ……ああ……！」

そしてその指をケーシヤの膣内へとゆっくり挿入した。

「く……う、はあ、はっ……」

「あまり締め付けないほうがいいぞ？ カプセルが割れてしまうからな」

「う……くあ……はあ……」

ケーシヤの身体が細かく震える。

荒い息を必死に抑えながらケーシヤは脱力した。

（こうするしかない……けど……）

男の前で何の抵抗もできず、半裸を晒していることは

確実にケーシヤを追い詰めていた。

こんな状態では反撃することはできない。

処女が初めての男の前で恐怖しながら脱力しているのと、

やっていることは一緒なのだ。

「や……はあ、あ……」

男の指が膣内で蠢く。

決して激しい動きではなく、

男が自ら残りのカプセルを割るつもりはないことがわかる。

（こいつ……あくまで私に……！）

そう、男はケーシヤが自身でカプセルを割り、

破滅への階段を登ってしまうのを待つつもりでいるのだ。

（絶対に屈しない……ッ）

ケーシヤは決意を新たにし、男の責めに耐える。

だがそうするためには男の前で脱力せざるを得ず、

まるで性行為を許すかのように無防備な身体を晒すことでもあった。

その矛盾が徐々にケーシヤを追い詰めていく――。



「あ……はあ、あ、うう……はあ、はあ……！」
それから数時間。

脱力しているケーシャを男はゆつくりと弄んだ。

「ひ……うぐ、はあ、ん……ふあ、はあ……」
うつつらと全身に汗が浮かび、

秘所からはとめどなく愛液が垂れている。

パキ――。

「ああ！ ひ……う……くう……ッ」

先ほどから十分に一回程度のペースで

いくつかのカプセルが割れていた。

まだまだ腔内には割れていないカプセルが大量に残っている。
男があえて時間をかけて楽しんでいるのは明白だった。

「はあ、う……ひあ、はあ……！」

ケーシャが大きく肩で息をして耐える。

(ダメ……ここで流されたらせんぶ、終わる……！)

もう男に抵抗するどころではなかった。

指で秘所をいじられていても嫌悪感を抱く余裕すらない。

ひたすらに媚薬の効果に耐えることが

今のケーシャにできる精一杯だ。

「さすがにそろそろ口を割る気になってきたかな？」

「はあはあ……！」

ケーシャは答えずに男から顔を背ける。

「フフフ……なかなかの精神力だ……ますます気に入ったぞ」

腔内に挿入したままの指が心地良く締め付けられ、

ケーシャのそこがいかにかに刺激を欲しているかがわかる。

けれどケーシャが口を開く気配はなかった。

「その精神力に敬意を表して……直接 私のモノをくれてやろう」

普段ならもつと焦らしていたところだが、

ケーシャの強く美しい心と身体の魅力が

男の情動と征服欲を突き動かしていた。



「あ……や、うあ……!!」
なんとか逃れようとするケーシヤを男が抑えつける。

「オスの形を覚えさせてやろう」
隆々と勃起したペニスを股間に押し付けた。

「く……はあ、ああ……」
何か言おうとするケーシヤのアゴをおさえる。

「指ですらあんなに締め付けてきたんだ。チ○ポだとどれほどかな？」
「あ——あああ！」

ズブ、ズブ——。

男がゆつくりと腰を沈める。
「はあ、ひ……あ、やあ、ああああ……!!」

ケーシヤの胎内に訪れた圧迫感。
それは膣口から下腹の奥へとゆつくり確実に進んで——。
(ダメ……割れる……、なかで、全部……!!)
パキ——。

「あ……」

パキパキパキ、パキン——!
「いやあ、ああ、ああああああつ!!」

「いい反応だ……!!」
男の剛直がどんだんケーシヤの奥へと侵入してき、

同時に残りのカプセルもどんだん割れていく。
「あ……はあ、ああ……!!」

カプセルの中身が膣内にどんだんぶちまけられる。
「おお……!! 素晴らしい締め付けたな……!!」

パキパキパキパキ——!

男は最奥まで時間をかけて剛直を突き入れた。
カプセルの溶液は行き場を失い、やがては子宮内にも流れこむ。
「ひ——!!? あ、はあ、う……ああああああつ!!」

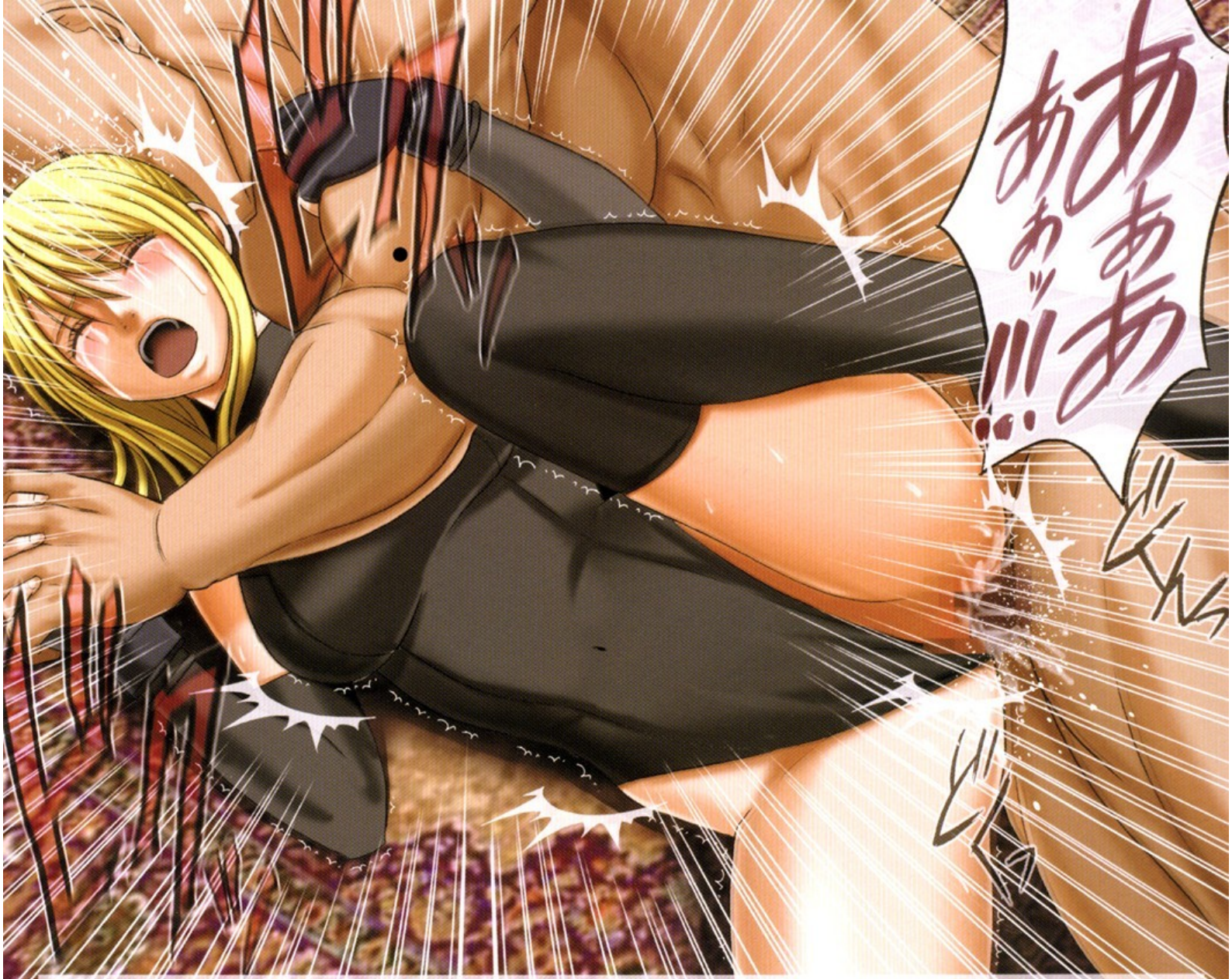
媚薬の効果と挿入によって一気に快感が許容量を超え、
奥まで突き込まれたその一瞬にケーシヤは絶頂に達する。

「あ、やあ……うあ、はああ……止まらない、い、あ……
ああああああああああああつ!!」

感覚が異常なほど敏感になる。

男に突き入れられる感覚が今のケーシヤの全てだった。
「ま……待て! う……動かすな! ああああつ!!」
(まずい! これはまずい! 耐えられない!)

膣内で剛直が動くときだけで絶頂に達してしまう。



「ああ、はあ、う……あ、あああつ！」
もうイキっぱなしになっていた。
ペニスが一往復し、膣口から子宮口に突き込まれるたびに
絶頂に達してしまふ。

「ひぐ、う……くう、はあ、ああ、やあ……！」
がくがくと全身が震え、媚薬混じりの愛液が結合部から垂れ落ちる。
「あああ……はあ、あ、あああああつ！」
膣壁は男のものにしつかりと絡みつぎ、貪欲に快楽を求めていた。

「お前が白状するのならやめてやってもいいんだぞ？」
「ひいいいっ！うあああああつ！」

「さあ言え！お前はどこの差し金だ？」

「く……ふう、ううう……はあ、う……！」

もうケーシヤには理性はほとんど残っていない。

訓練で何度も叩き込まれた習慣だけで自分を抑えていた。

「あく……ひいう、うう、んんううう！」

脳の神経が焼き切れるほどの快感。

「あ、ま、また……い、く……！」

イク、あ、ひ、あああああああああああつ！！

「このままイキすぎて気が狂うまで犯してやろう」

「うあ、はああ、あああああああ！」

男は力強い一定のペースで腰を動かし、

ケーシヤの膣内を蹂躪し続けた。

何度も最奥を突き、自分のペニスの形を覚えこませる。

力任せに身勝手に、男に最奥を突かれる。

そんな愛のかけらもない行為で達してしまう女に

ケーシヤを作りかえようとしていた。

「ひ……あ、くう、はあ、あああああつ！」

何度目かの絶頂の後、ついにケーシヤの身体が完全に脱力した。

「あ……は——う……！」

「フン……気絶したか。まあいい、これからだ」

気絶していてもケーシヤの膣壁はペニスを締め付け、

絡みついてくる。

男はその反応と心地良さに邪な笑みを浮かべた。



「う……く……」
(こ)は……)

ケーシャが目を覚ましたのは、
悪趣味な器具や道具が大量に並べられている薄暗い部屋だった。
(拷問部屋、か……?)

「あ……うあ、はあ……！」

感覚がはつきりしてくるとさっそく下腹の奥が疼きだす。

(媚薬の効果が……まだ……!)

「お目覚めか」

「く……！」

男が身体を密着させ、ケーシャの耳をぞろりと舐め上げた。

「ひう！」

「我が組織の媚薬はなかなかのものだろうか？」

「はあ……あ、ん、はう……」

いくらか時間は経ち、体力はそれなりに回復してきている。

けれど、感度はまるで変化していなかった。

「あう……はあ、はあ、はあつ」

目が覚めて意識がはつきりしたすと、

空気の流れすら快感に感じてしまう。

男と肌で触れ合っている部分が熱くほてり、

どうしようもなくそのあたたかさたくまじさを求めてしまう――。

「言っただろう お前はもう一生このいやらしいカラダのままだ」

(そ、そんな……本当に……)

今の自分の身体の感覚を自覚すると、

男の言葉が嘘でないことはわかった。

「う……はあ、あ……」

肌がぴりぴりと疼き、敏感になりすぎた粘膜が

かきまわされることを望んでいる。

「はあ、んう……はう、く……」

ケーシャは知らず、自らの口内を舌でかき回していた。

安っぽいポルノ映像のなかの女優がしていたようなその行為に、

密かな快感を感じてしまう――。



「さあ あきらめて情報を吐くんだ」
言いながら男がケーシヤの身体に指を伸ばす。

「あ……」
おぞましいはずだった、男に触られるという行為。

だが今はその太い指先を期待のこもった目で見てしまう。
(違う……！ 私、こんな……！)

「あ、ひあ、あああ！」
心のなかでいくら否定しても、

乳首を摘まれると敏感に反応してしまう。
「んく……ふあ、あく、んう……！」

肩や首筋に舌を這わされ、べったりと男の唾液がつく。
特に感じてしまうのは首筋。

人体の弱点であるそこを他人に触らせるなどもっての他なのに、
男に唇で食まれるとパチパチと頭のなかで火花が散る。

「や……あ、はあ、あ……！」
首筋を舐められながら乳首をいじられ、

ケーシヤは簡単に絶頂に達してしまった。
「ふあ……んう……う……」

(もう戻らないなんて……)
ずっとこの身体のままなのか——

絶望の間がケーシヤの胸中に落ちる。
だが、その絶望の奥底には身体を熱くたぎらせ、

胸を切なく締め付ける何かがあった。
「吐くつもりがないなら、

またこっちで楽しませてもらうとするか」
男は隆起したペニスをケーシヤに見せつけた。

「あ……」
しっかりとケーシヤの身体をおさえつけてから、

膣口に龟头を押し付ける。
(……！ またあんなものが入ってきたら……！)



ズ、ズヌ——。

亀頭の先端が膣肉を割り、ピンク色のそこを巻き込むように広がっていく。
「ま…待て！入れないで…！入れないでッ！」

「ん？」

ケーシャの声はほとんど悲鳴であり、懇願でもあった。

先ほど挿入されたときの地獄のような快感は、

ケーシャに恐怖を覚えさせてもいたのだ。

（またあんなのを味わわされたら……本当に私が私でなくなる……）

「お願い…！」

「入れられるのはイヤか？だったら…」

「わ…分かった！言う！言うから…！」

「ククク…いい子だ。だが——」

「!？」

男は屈したケーシャの表情を除きこみつつ、再び腰を前に進めた。

「あああああッ！」

ズブ、ズブ、ズヌ——！

男のものが一気にケーシャの胎内へと埋まった。

狭いそこをかき分け、みっちり最奥まで挿入する。

「く…ひ、あ、はあ、ああ…！」

「どうした？早く言え…でないとこのまま突き続けるぞ？」

「ひう!？」

男にはもう、ケーシャと取引をするつもりはなかった。

ただその肉体を蹂躪し、美しかった精神を汚すために言葉を操る。

「言えないなら——」

「わ…私は…くあッ！あああああッ！」

あわてて情報をしゃべろうとするケーシャ。

だが、男は激しく腰を振り始める。

「ああ、あああッ！ わ、わたし…は、あん、んんう！」

く、はあ、や、ま、まって…あ、はあ、うああああッ！」

「んん？聞こえないな？どこの者なんだ？」

「こんなに、されたら…しゃべれ、はあ、あああ、やあ、うううん！」

激しいピストンでまともに喋ることはできない。

それでもケーシャは男の言葉に従って、必死に情報をしゃべろうとする。



「くう……ふあ、はあ、ああ、やあ……！」
ケーシャはもう完全におもちゃにされていた。

犬の交尾のような屈辱的な姿勢でひたすら奥を突かれ、膣内を蹂躪される。

「あ……ああ……！」

「ククク……。女スパイなど他愛もない……」

男は笑い、征服し支配した充実感と共に最奥を突きまくった。

「あうく、んう……！」 ふあ、はあ、あああ……！」

まだ薬の効果が全く切れていないケーシャの身体は、

剛直の往復を貪欲に受け入れる。

（擦れてる……カリが、いいところにあたって……っ）

ケーシャの尻がゆるゆると動き始めた。

男の動きにあわせて自ら快感を求め、心地いいポイントを探しているのだ。

奥を突かれるたびに小さな絶頂に達している。

膣壁は余すところなく男のものを締め付け、裏筋と雁首を優しく包んだ。

「さて……そろそろ一発目を出すか。どこに出して欲しい？」

「え……」

「精液をどこにぶちまけて欲しいかと聞いているんだ」

「あ……ふあ、あああ……！」

ドン、と男が腰の前に突き出す。

それだけでケーシャはもうまともに話せなくなってしまう。

「このまま答えなければ膣内に出す。さあ、どこに出して欲しいか言え」

「そ、そんな……ふあ、ああ、だめ……な、なかは……」

はあ、あああ、ふあああん、んう！」

（ダメ……なかだけは……！）

快楽に吞まれているケーシャがまともに応えることはできない。

男はそれを知っていて、あえて絶望に墮とす。

「あ、はあ、うう……ふあ、あああああ……！」

「膣内でもいいんだな？」

（いや、いやなのに……！）

「あ……い、はあ、ううう、ん、ふあ、あ、はあ……！」

「ククク……フハハハハ！ なかでたつぷりと味わうがいい！」

「んふあああ、はあ、あ、は——あああああああ……！」



ドグ、ドブ、ドビュ——！

「ッ!?!」

どろりとした熱い液体が膣内で広がる。

容赦なく執拗に奥を突かれ続け、

この短時間にかなり開発されてしまったケーシヤの子宮口は、その白濁を快楽と共に受け入れた。

「あ——ああ、は、あ——あああああああああああつ!!」

(なに……何なの、これ……!)

カプセルの溶液が子宮内にまで沁みていたせいで、

ケーシヤは子宮内を男の精で汚されることに

ありえないほどの悦楽を感じてしまう——。

(なかに出されて……い、く……イっちゃう……!)

「ふあああああ、はあ、あう……

ぐ、ううう、やあ……

あああああああああああ——!!」



数時間後――。

「あ……はあ、ふあ、はう……ん……」

イキ続けたケーシャには
さすがに疲れの色が見える。

もう絶頂に達しても、

最初に膣内射精されたときほど
激しい反応はできなかった。

「あく……ん……はあ、あ……」

ただ気だるく身体を動かして男に合わせ、
犯され続けている――。

男は情報を聞き出しながら

飽きずに何度も膣内に射精した。

挿入してから一度も抜くことなく、

白濁の熱さと自らの剛直の形を

完全にケーシャに叩き込んだのだった。

「これでお前はオレのものだ」

「ふあ、はあ、あ……ん、くう、う……」

(私は……)

自分の素性や目的だけでなく、

組織の情報まで喋らされた。

ケーシャにはもう女スパイとしての

プライドは残っていない。

「あう、ん、はあ、ああ……！」

男はゆつくりと腰を動かし、

丁寧にケーシャを愛撫する。

多少こなれてケーシャの膣襞は

男の優しい動きに敏感に反応し、

切なく甘くベニスを締め付けた。

「また膣内に出すぞ。いいな？」

「あ……」

男が耳許で囁くとケーシャの視線が揺れる。

しかしその揺れははずれ取まり、

諦めたように男に身を預け――。

「……はい」

ケーシャは何度目かになるその感覚を

待ち望んだ……。



セグア VS ニンテルド！
コンシューム大陸の占有率をめぐる
ハードな戦争！

蒼、世界の中心で 完全版

この本は同人ソフト「女格闘家乱舞」の
CGを収録したものです。

今回の3キャラクターはどれも気に入っています。

ケーシャはわりと簡単にデザインできました。

鏡子は前髪をそろえたバージョンやポニーテールのバージョンも
考えました。

メイは一番デザインに苦労しました。

個人的にはもうちょっとギャルっぽい感じにしたかったのですが、
それだとお嬢様っぽさが無くなってしまうので。

ストーリーとしては鏡子が一番よくできたかなと思います。

要望が多ければ鏡子編やメイ編はマンガ化してみたいとも思います。

ケーシャ ラフ画



鏡子 ラフ画



メイ ラフ画



2011年 5月20日発行

女格闘家乱舞

フルカラー同人誌版

発行 / クリムゾン

<http://www.alles.or.jp/~uir>

印刷 / 大陽出版株式会社

ISBN978-4-904277-31-7

戦いの中で恥辱を受け 犯されていく女格闘家たち



9784904277317



1920079010009

ISBN978-4-904277-31-7

C0079 ¥1000E

定価 本体1000円+税

古武術家の「火浦鏡子」は道場破りの男に、子供たちの目の前で力の差を見せ付けられながら辱められ、れているマソの素質を目覚めさせられていく。



こは 船闘技をする場じゃないの!?

アハハハ! そうよただ...

フフフ...
こんな美しい“女”を好きにできるなんて...最高の喜びよ



ひよつとしてインラン だったんですか?

ち...ちが...私...はアッ...ああ...!

大丈夫ですよ お嬢様が本当にインランじゃないなら私たちの攻めなんて無視できるはずですから

ふ...ふ...ふ...!!

気持いいことたくさんしてあげますからね

た...た...た...の人の前でいっぱいイクといひですよ

オリンピック金メダリストで大財閥のお嬢様である「タイ」は興味本位で出場した地下格闘技場の舞台上、自らのセコンドに裏切られて集団レス責め、そして最後はレフェリーの醜い男に犯される。



ん...ん...ん...

ん...ん...ん...



ん...ん...ん...

ん...ん...ん...

女スパイ「ケーシャ」は 潜入先で敵の幹部に捕まり、卑猥なクスリを股間に押し込まれた状態で戦うことに。どんどん敏感になりまともに戦えなくケーシャに敵の幹部は拷問のようなセックスを延々と仕掛けてくる。

● 18歳未満の方は購入できません